

大切な探し物

八代の地面

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

北関東多重クレーター湖上に浮かぶ水上学園都市アスタリスク
そこで開催される《星武祭》で優勝すれば望みを叶えてくれるとい
う

この話は幼い頃から見つからない探し物をする1人の少年の話

目次

設定	1
『Important things』	4
久々の感覚	9
自己紹介タイム	12
裏の顔	15
そして物語は動き出す	20
覗く狂気	25
休日	31
実力	40
期待と失望	49
初戦	57
思惑	63
心配と信頼	69
初手	73
その道は何処へ	77
本心	83
我儘と覚悟	92
忍び寄る	97
最強の	100
話をしよう	107
決勝戦開始	110
信じているから	115
熱戦	123

設定

主人公設定

名前・・・一色雅也（いつしきまさや）

見た目・・・黒目の黒髪、目にかかるかギリギリの長さ。知名度は高くないが俗に言うイケメンの類

年齢・・・16歳

身長・・・173cm

好きなこと・・・人をからかう、人間観察、情報収集、強い奴

嫌いなこと・・・不測の事態、勘のいい人間

その他

魔術師でFAIRY TAILの魔法を使う。

学園内では実力をなるべく隠している。

普段は明るい性格で、学園では何でも屋として人助けを進んでやっている。

補足

今後の展開を書くにあたって一番都合が良い設定です。多分ご都合主義です。が、まだ考えている途中なので少し変わる部分や明らかになっていく部分もあると思います。追いつけなくなったらすみません。

ウエンディ・マーベル

数年前、雅也が世界中を旅している途中迷子になっていたところを雅也が見つければらくの間一緒に旅をしていた。

雅也に恩返しをしたいという一心でアスタリスクに来たが偶然にも雅也にまた迷子を助けられ雅也の仕事を手伝っている。（部屋の掃除など）

星導館の中等部に所属しており天空の滅竜魔法を使うが戦闘能力

はまだない。

補足

戦闘能力は今はないんです。今は…

一部の設定は原作からパクツ…リスペクトしてますが残念なことにヒロインではないです。ヒロインじゃないんです。

自分の好きなキャラな故に上手く表せるか心配なところ。

再開発エリアでの設定

再開発エリアで情報屋や情報集めをしているのは目的の為。

情報集めをするが基本は自分の目的や取引に必要な情報しか集めず、学園内には別の情報網を持っている。

黒情報屋として動く時は信用できる人間としてしか取引をせず、危なくなったら基本は逃げる。(戦うと正体がバレる可能性があるため)

情報を集めるために世界を旅していたところ、アスタリスクに答えがある可能性が浮上しその情報の裏付けの為に更に情報を集めている。

余り公には出来ない内容なので慎重に行動している。

外を行動する時は黒いフード付きのコートを着ている。(KHの13機関みたいな)

2人の正体や活動内容を知っているのはクローディア、夜吹、シルヴィアの3人。

クローディアにはすぐに見抜かれたが、夜吹には雅也から話した。

(必要以上に詮索されないように)

シルヴィアとは再開発エリアで再会し、話をするうちに互いの目的

を知った。それから何度々シルヴィアの方から連絡が来るようになった。

それから少したったある日、雅也がウエンディを再開発エリアで見つけた。それ以来仕事を手伝ってもらっている。

『Important things』

男の子は泣いていた

自分の俯いた顔から落ちる涙で地面が濡れている

何日間こうして泣いていただろうか男の子にはもう分からなくなっていた

「どこへ行ったの…一人にしないで…」

暗い森に男の子の泣き声に混ざった弱々しい声が聞こえる。

『…ぞ…は…』

『そ…に…つい…』

途切れ途切れの誰かの声が聞こえる…

男の子の声ではない他の誰かの声

だが聞いたことのある優しい声だ…

周りには人の気配は無い

男の子は泣きながら恐る恐る顔を上げ周りのを見渡すが、声の主は
見当たらない

(やっぱり僕は一人なんだ…)

男の子が諦めたようにまた顔を俯かせようとしたその時

森の奥が急に明るく光り出した

男の子は立ち上がってその光の方を見つめた

(なんだろう… 出口なのかな… でも一人は怖いよ…)

男の子が怯えながら光を見つめていた

トンっ

と、不意に誰かに背中を押される感覚がした

男の子は慌てて後ろを振り返るがそこには誰もいない

しかし男の子には確かに聞こえた

『行け、お前の信じる道を。』

男の子は涙を拭って光の方を向き

「わかった… 僕は行くよ… 自分の信じる道を！」

その声に笑顔で男の子は答えた

そして男の子は光の方へと歩き始めた…

ドンツ

と鈍い音がするのと同時に少年は目を覚ました。

まだ寝ぼけている横目でベッドが自分より高い位置にある貴重な現状を確認し、自分がベッドから落ちたことを冷静に判断する。

「……………またあの夢かよ……………」

少年は呆れたようにため息をつき体を起こす。

少年は時計を見てまだ早朝であることを確認し、身だしなみを最低限整え自分の部屋出て寮を後にした。

少年、一色雅也16歳は3年前にこのアスタリスクの星導館に特待生として入った。

その前は1人で世界中をある目的の為に旅していたが今はこのアスタリスクを拠点としている。

そして今は日課の散歩中だ。このアスタリスクに来てからはほぼ毎日だ。

最初は学園の地図を頭に入れようと早起きをして散歩していたが、今では散歩が1つの趣味になっていた。

早朝のこの時間帯は普段は決闘などで盛り上がっている学園内も静かだ。昼間の騒がしいのも嫌いではないが朝独特の空気を吸って散歩するのが雅也のお気に入りだった。

「やっぱり早起きはサーモンがなんたらっていうしな〜」

などと下らない独り言を呟きながら雅也は歩いていった。

「漫画とかならここで何か起こるんだろうな〜」

雅也がそう言った矢先目の前を2人の生徒が何かを話しながら走り抜けていった。

「おい、向こうで決闘やってるってよ!」

「こんな朝から誰が戦ってるんだ?」

「あの《華焰の魔女》だってよ!」

「まじかよ!そりゃあ見に行かなきゃな!」

(……まだ朝なのにこの野次馬精神は流石だな)

と思いつつ

(あのユリスが決闘か、面白そうだな)

と自分も野次馬をしに行く雅也であった。

久々の感覚

雅也が野次馬を追いかけてみると多くの生徒の中心で決闘をしている人物が2人。片方は勿論《華焰の魔女》ことユリスだ。

(しかしそのユリスと戦うとなると一体誰なんだろう?)

気になった雅也は野次馬の中の見覚えのある後ろ姿に話しかけた。

「よう夜吹、朝から熱心にネタ集めか?」

とクラスメートの夜吹に聞いた。

「おお一色か。当たり前前だろ?あの姫様と決闘、しかも相手もなかなかやるみたいだしな」

「まだ朝だったのにユリスと戦うなんて大したやつだな」

と言いながら雅也はそのユリスの相手を見る。

(あれは…)

生徒達の注目を集めているユリスの相手に雅也は見覚えがあった。

しかし雅也はそれは口にも顔にも出さずにその相手を見ていた。

「すげえよなああいつ。新顔なのに姫様の攻撃を凌いでるんだぜ」

夜吹や周りの生徒が感心している横で雅也は心の中に疑問を持っている。

(彼は確かクローディアが言ってた天霧綾斗君…確かスカウトからの反対を押し切ってまで欲しかった人だったか。でもユリスの攻撃を何とか凌いでるように見えるし…いや実力隠しているのか?そ

れとも….)

色んな考えが雅也の中に浮かんできていたその時

「咲き誇れ——六弁の爆焰花！」

ユリスが火球を出し大技を繰り出そうとしていた。

勿論ギャラリ―は巻き込まれたくないので距離を取った。雅也も周りに合わせて下がった。しかし雅也はユリスの技よりも遠方、何かがユリスを狙っているのが見えた。

(狙撃手？ユリスを潰そうとしているのか…この時期だし例の奴等かなあ。かと言って俺は傍観主義だしねえ。それに…?)

雅也は戦いに、否、綾斗に視線を戻す。

ユリスの火球が綾斗目掛けて飛んでゆく。

(さて天霧君。気づいているんだろ？君はどうする)

「爆ぜろ！」

ユリスが火球を爆発させた。その爆風から雅也は顔を庇いつつ

(さあ天霧君！見せてくれ！)

と心で笑みを浮かべつつ結果を待った。

そして爆風の中から…

「天霧辰明流剣術初伝——貳蛟龍！」

綾斗が技を出してユリスとの距離を詰める。

そして綾斗がユリスを押し倒して狙撃手の放った矢からユリスを守った。

何やら2人は言い合っているようだが

(やっぱり面白いねえ天霧君。君はどんな話を見せてくれんだ?)

そんな久々の感覚に浸っていた。

(おっと… あんまり長居していると厄介事に巻き込まれそうな予感がするな…)

そして我に帰った雅也はその場を離れようとしたその時

「はいはい、そこまでにしてくださいね。」

厄介事が手を打つ音と共にやって来た。

自己紹介タイム

やってきた厄介事、星導館学園生徒会長　クローディア・エン
フィールド　だ。

クローディアはユリスと綾斗の方を向きその決闘の破棄をしたよ
うだ。

ユリスがクローディアに何か言っていたがユリスの表情から察す
るに流石は自称腹黒女、何か上手い言い訳でもしたんだろう。そして
「皆さんもどうぞ解散してください。授業に遅刻してしまいますよ」
とクローディアがギャラリーに向かって言った。

ならばその言葉に甘えて撤退を…と逃走を図った雅也だったが
「あ。でも一色君は残ってくださいさ〜い」

(…名指しで止めてきやがった…。また厄介事に巻き込まれそうだ)
そう思いつつ仕事柄、立场上断れない雅也はクローディアや綾斗達
の元へ行った。

狙撃の件だろうか、綾斗がギャラリーに声を掛けようとしていた。

雅也は

「やめときな、もう逃げてるだろうよ」と綾斗に声を掛ける。

クローディアも綾斗にこういう事は少なくないと説明をした。

「風紀員に調査を命じましょう。勿論一色君もお手伝いしてください
ね?」

と笑顔で聞いてくる。

雅也には『拒否権など無い』と言わんばかりの笑顔に見えた。

そしてクローディアは雅也に近寄り耳元で囁いた。

「何か分かったことがあったら伝えてください。ユリスは星導館の大
事な生徒ですからね」

「大丈夫ですよ。ある程度は掴めてますので…」

雅也はそう返すとクローディアと一緒に綾斗とユリスが何やら話
している所へ割り込むように話しかけた。

「君は天霧綾斗君だね?俺はこの星導館で何でも屋をやっている一色
雅也、1年生だ。よろしくな!」

雅也は人懐っこい笑顔で自己紹介した。

1年3組 教室

雅也のクラスに綾斗が転入してきて短い自己紹介が終わった。

「だ、誰が火遊び相手ですか!」

というユリスの声で目を覚ました雅也。

朝は早起きだが夜更かしをするので睡眠が足りていないのだ。

少々寝ぼけていると雅也の後ろの席に綾斗が座った。綾斗がユリスに挨拶をし夜吹が綾斗に自己紹介をする。

「んで、おまえさんの前にいるのが学園の何でも屋の一色雅也だ。」

と勝手に紹介されたが雅也は後ろを振り返り、

「改めてよろしくな、天霧君」

「綾斗でいいよ、よろしくね雅也」

放課後

質問攻めにあっていた綾斗に夜吹と雅也が苦労を労い綾斗にユリスについて話していると

「夜吹は新聞部、雅也は何でも屋だっけ?」

と綾斗が雅也に質問する。

「そ。と言つても黒いことはしないぜ? 探し物搜索や悩み相談。色んな人が頼みに来てくれてねえ。やっぱり人つて面白いからやめられないんだよね!」

と答える。

「夜吹といい雅也といい俺は変な人に絡まれやすいのかな?」

「おいおい、俺は商売だが一色のはただの趣味なんだぜ? 何考えてるか分かんない奴と一緒にしないでくれよ」

と綾斗の疑問に夜吹が雅也を変なものを見る目で返した。

「まあ、自分でも少し浮いてる自覚はあるしなあ。でもそんな事気に

してられないんだぜ？ん…おっと、呼び出した。」

雅也はそう言つて空間ウインドウを確認すると、

「じゃあな綾斗！何か困ったらこの何でも屋にお任せあれ〜」
と手を振って教室を去った

裏の顔

く再開発エリアく

「ふうく、ここに来るまで結構神経使うのキツイなく。更にもう春なのにこのコート着ないといけないとは…でも正体バレたら困るし」

雅也が着ていた真つ黒なフード付きのコートを脱ぎ近くの椅子に掛ける。

「仕方ないですよ、そろそろ鳳凰星武祭がありますから。これからは警備の目が厳しくなる時期ですよ」

と雅也の後ろの少女も同じようにコートを脱ぎながら言った。

その少女はウエンディ・マーベル。星導館の中等部の生徒だ。

昔、雅也が世界中を旅している時に一人で泣き歩いたところを雅也が発見し、少しの間一緒に旅をしていた。

そして1年前、ウエンディが『恩返しをしたい』と雅也を探しにアスタリスクにやって来たのだ。再開発エリアでウエンディが迷子になっているところを偶然雅也が見つけれ現在は仕事を手伝ってもらっている。

今、2人は再開発エリアの雅也達の拠点に居た。

「それに今日は雅也さんが集合をかけたのに本人が忘れてるなんて…」

「いやあ、ごめんごめん。今日は転校生が来てだね、そいつと夜吹と話してたら忘れてて」

そう謝りながら雅也は手を伸ばし人差し指で何かのボタンを押す。

すると2人を大量のパソコンの光が覆った。しかしそれを気にせず

2人は話を続けた。

「その方は例の天霧綾斗さんですか？」

「そうそう、やっぱり綾斗は見込んだとおりの強さだったよ。ただ、まだ未完成って印象だったなあ。」

「未完成、ですか？私は闘いとかはよくわかりません…。」

「誰にだって得意不得意、向き不向きはあるもんだよ。それにウエンデイにはウエンデイだけの良さがある。だから気にしない気にしない」

そうやって雅也は大量の画面の方を向き

「さあて、今日も始めようか！」

と気合を入れた。

〜1年前〜

(ここに彼らがいるかもしれない…)

雅也が星導館に来て間もない頃

世界中を旅している間に雅也は既に目的のヒントを掴んでいた。

(その裏付けをする為にここに来たけど、いきなり星武祭で優勝して叶えるのは色々と不味いだろうし…)

雅也は特待生として星導館に入ったが決闘や面倒事を嫌い目的の為にだけに奔走していた。お陰でほかの生徒達からは良くは思われていなかった。そんな奴が急に星武祭で優勝など、注目されていずれば目的がバレてしまうだろう。

その為、影で行動をするべく先ずは拠点となる場所を探していた。

(再開発エリア…ここなら情報が集まりやすいし人目につかないかな…)

そう考えた雅也は再開発エリアのとある廃ビルを拠点に決め、資金調達を始めた。

再開発エリアでは黒いコートで正体を隠し情報屋として活動を始め、影では「黒情報屋」と呼ばれるようになっていた。

そして学園内でも少しでも情報と資金を集めようと雅也は何でも屋を始めた。

く現在く

「…これはっ！」

大量のパソコンの画面と向き合うこと3時間。雅也は声をあげて椅子から立ち上がった。

雅也の後ろの机で目を擦りながら書類を整理していたウエンデイがその声に驚く。

「どど、どうしたんですか？」

「統合企業財体だ…」

「え?」

「奴らがああ情報を隠している…その証拠を見つけたんだ」

「え… えええええええー！」

ウエンデイが先程の雅也よりも声を出し驚く。

「雅也さん、ととと統合企業財体の情報ハッキングしたんですかあ!？」

「あれ?言ってなかったっけ。結構前からしてたよ?」

雅也は当たり前前のような顔で答え、対するウエンデイは信じられないといった様子でパソコンの画面に顔を近づける。

「本当だ… き、気付きませんでした」

「まあ俺も言ってなかったし、ウエンデイは基本部屋の掃除とかしてるだけだし知らないのも無理ないか」

「うう…： ごめんなさい…： 私、機械とか苦手で…：」

ウエンデイはそう言って落ち込んでしまう。

「さ、さっきも言ったけど人には向き不向きがあるんだよ？ウエンデイが掃除とかしてくれるのは凄い助かってるんだ」

元気づけようと雅也はフォローする。

（しかしまさか統合企業財体が持っていたとは…： しかも確実な証拠はもう残ってないだろうね…： でもやっと尻尾を掴んだぞ）

画面に目を向け直し真剣な顔でパソコンを見ていると、突然どこからか音が鳴りだした。

そして物語は動き出す

突然の音に雅也もウェンデも驚いた。

シリアスな雰囲気をぶち壊すような音が雅也の携帯端末から出ていることに気付き慌てて携帯を手取る。

電話の着信画面が表示されており、「非通知」となっていたが雅也はこの相手に心当たりがあるので迷わず応答を押した。

「…俺なんかに電話してる暇があんのか？シルヴィア」

『こんな時間にしか君は電話に出てくれないでしょ？王竜星武祭の会場で会ったとき以来忙しくて連絡出来なかったからね』

雅也の端末からは《戦慄の魔女》シルヴィア・リユーネハイムの声が聞こえた。

『それにこの時間なら例のあの場所で調べ物とかしてると思ったんだ』

「まあ確かにしてたけどさあ。んで、要件は？」

淡々と返事をする雅也に少し拗ねた様子でシルヴィアは続けた、

『なんか冷たいなあ。まあいつもの事なんだけど…えっと、それでね？例の件なんだけど…何かわかったかな？』

シルヴィアが声のトーンを下げて少し落ち込んだ様子で雅也に問いかけた。

「…すまん、その件は俺の方でも何も掴めてないんだ…」

『そっか…ごめんね？雅也君にも目的があるのに手伝ってもらっ

て』

「いや、気にすんな。俺もアスタリスクに来てから世話になったし…。」

雅也が拠点を再開発エリアにして間もない頃。再開発エリアでシルヴィアと雅也は出会った2人は互いの素性や目的を知った。

すると雅也が

「このアスタリスクや再開発エリアについて教えてくれ。そしたらシルヴィアの目的を俺も手伝おう」

という取引を提案した。これが黒情報屋としての初仕事だった。

2人の間に重苦しい空気が流れる。

「えっと… 雅也さん、大丈夫ですか？」

その空気を心配したのかウエンデイが雅也に声をかける。

「あ、ああ。大丈夫だよ。ありがとうな」

雅也が返事をする電話から

『あれ、その声はウエンデイちゃん？ちよつと雅也君代わって代わって！』

先程とは真反対に明るい声で雅也に電話を代わるように声が響く。シルヴィアはウエンデイを妹のように可愛がっているで久しぶりに声を聞いてテンションが上がっているようだ。

「お、おう。わかったから。ほらウエンデイ、シルヴィアが代われってさ」

雅也はその元気に少し押されながらウエンデイに携帯を渡した。

『もしもウエンデイちゃん？久しぶりだね！』

「ひゃ、ひゃい！おひしゃしぶりでしゅ！」

と噛みまくりながら代わったウエンデイが応える。

数ヶ月前、王竜星武祭の会場で直接会った時にはウエンデイは嬉しさのあまり倒れてしまった。つまりウエンデイはシルヴィアの大ファンなのだ。

「この前の新曲聴きました！すごく興奮しました！」

『ありがとう。そう言われると凄いやる気出てくるなあ』

こんなに元気なウエンデイを見るのも珍しいなと内心苦笑いしながら雅也はパソコンの電源を切る。

「あと、えっと… あ！王竜星武祭準優勝おめでとうございます！」

緊張の中、必死に話の種を探し出したウエンデイ。

『うん、ありがとう。本当は優勝したかったけどね…』

「す、すみません！私そんなつもりじゃ…」

『え、あ！全然気にしてないよ！凄い嬉しいよ！こっちこそ応援してくれてありがとうだよ！』

「…」

『…』

再びの静寂。

半泣きで無言になっってしまったウエンデイを見た雅也が携帯のスピーカーをオンにするように伝えた。

「あゝ、えっと……。大丈夫か？」

「大丈夫だよ（です）！」

「ここまで大丈夫じゃない状況は初めて見たぞ！」

ツツコミを入れる雅也。

『そ、そうだ！今度の星武祭の事なんだけど！』

2人に否定され割と本気で心配になった雅也だったが、シルヴィアの無理矢理な話の切り替えによって一旦頭の片隅に追いやった。

『2人は今度の鳳凰星武祭はどうするの？』

「ああ、そのことなんだが……。ウエンデイ」

「は、はい！」

雅也の呼びかけに涙を拭いながらウエンデイが返事をする。

「次の鳳凰星武祭。俺と一緒に出てくれないか」

「え…え!？」

本日何度目かのウエンデイの驚き。

『ということは雅也君、探し物は見つかったの？』

シルヴィアが少し心配そうな声で聞いてくる。

「まだ尻尾だけだな。鳳凰星武祭で優勝して決定打を手に入れる。その為にウエンデイ、手伝ってくれるか？」

その問い掛けに

「も、勿論です！私は雅也さんに恩返しをする為にここに来ましたから！」

ウエンデイはかつてないくらい元気な声で了承した。

覗く狂気

「やべえ！二度寝なんかするんじゃないよな…間に合ってくれえ！」

雅也は今、寮から校舎への道を走っていた。

鳳凰星武祭に出場する事を決めた雅也達はあの後、寮に戻り眠りについた。だが色んな情報量を1日に詰め込んだ頭はいつもより雅也の睡眠を深くしていった。

そのため、朝目覚ましの音が聞こえたのだが…

(ん…うるさいなあ…あと5分…)
そしてまた深い眠りへついたのであった。

「うおおおおーギリギリセーフ！」

教室に滑り込むように入った雅也は何事も無かったかのように自分の席へ向かう。

「いやあ祈りは届くものなんだねえ。うんうん思いの力はすごいや。さして今日も頑張つて授業を「何がギリギリセーフだ一色。」を…？」

しかしそれを阻む影が雅也の前に立ちはだかる。よく見るとそれは何かを振り上げているようだ。

「バツチリ遅刻だ一色。いい度胸してるじゃないか。」

「あ、八津崎先生…おはようございま」

ごっつんっ

「起きてください一色君。起きてくださいーい。」

ふと、声が聞こえる。聞いたことのある声だがわざわざ自分を起こすのだ。仕事の依頼だろうか、と思い

「ふわあ〜く…」

欠伸をしながら雅也は目を覚ます。

「いつてえ〜…まだ頭がいてえよお…」

あの後げんこつと説教を喰らった雅也。朝にもらった痛みがまだ続いていた。

「何でも屋として夜遅くまで働くのは構いませんが、学業を疎かにしてはいけませんよ」

「あれ？クローディア。なんでうちのクラスにいるのさ」

その声の主はクローディアだった。

「私は綾斗に純星煌式武装に関する書類を渡しに来ました。」

なるほど、と納得した雅也は辺りを見渡す。

ユリスと綾斗、そして綾斗の幼なじみだという（夜吹情報）の沙々宮紗夜の姿があった。

「なんだか賑やかだな、なんの話だ？」

楽しそうな雅也の問い掛けに

「一色には関係ない。関わらない方が身のため」と紗夜。

「そうだな。一色、お前が来ると話が進まなくなりそうだ。」

続いてユリスが答える。

「ちよっ、ちよっと二人共。ごめん雅也、今から二人が学園内を案内してくれるっていう話で…。」

慰め混じりに説明する綾斗。

「……で、クローディアは俺に何か用事があるんじゃないの？」

涙目で訴えながら話をクローディアに振る雅也。

「ええ。一色君にはこれから生徒会室に来ていただきます。」

その訴えを笑顔でスルーしたクローディア。

「酷いやみんな。俺はみんなと仲良くしたいだけなのに…」

わざとらしく落ち込む雅也。

あれから綾斗達と別れた雅也とクローディアは生徒会室に来ていた。

「それで一色君、例の襲撃事件。何か分かりましたか？」

「あ…スルーですねわかります…。まああんな狙撃できる生徒なんて限られてるからね。」

真面目な表情になった雅也が続ける。

「その生徒ひとりひとり調べてったけど全員その時間はアリバイがあつてね。変だと思って色々調べたらこれが出てきたんだ」

そう言つて雅也がクローディアに空間ウィンドウを見せる。そこ

にはアルルカントの擬形体の情報が映されていた。

「やはりアルルカントですか…。」

「でも肝心の動かしている本人がまだ分からないんだ。人形を操作できる能力者って案外多くて。学園内の生徒であることは間違いないんだろうけど…。」

「アルルカントも黒情報屋を警戒しているのでしょうか。その貴方が掴めてないので…。」

雅也の正体を知っているクローディアは少し残念そうに話した。

「今では警備隊にまで目をつけられる始末さ。商売あがったりってやつだよ。困ったもんだよ…。昨日も…。あ、そうだ。」

愚痴をこぼしかけた雅也は突然思い出したその話題を口にした。

「クローディア、俺鳳凰星武祭にでるから」

「っ！ということとは…。見つけたのですか？」

先日のシルヴィアとほぼ同じ反応のクローディア。流石に驚いたようだ。

「ああ、やっと動く時が来たんだ。目標はもちろん優勝だけど」

雅也の表情が緩んでいく

「どれだけ楽しませてくれる人が出てくるか…」

ついには嬉しそうな表情で話す雅也。

クローディアは雅也のその笑顔を見た瞬間、今まで体感したことのない嫌な寒気を感じた。

そんなクローディアなどまるで眼中に無いかのように雅也は言い放った。

「楽しみだねエ」

と。

休日

数日後

生徒会室での雅也とクロードディアの会話の直後、ユリスと紗夜が何者かの襲撃を受けたことについて雅也はウエンデイと共に再開発工リアの拠点で犯人探しをしていた。

「ん〜：見つからないなあ。風紀員会も証拠掴めてないって言ってたし外から調べても犯人見つからないのかなあ」

「でもこのまま犯人が捕まらないとリースフェルト先輩もいつまた襲われるかわかりませんから…：」

今日は休日ということで2人は朝早くから拠点に来ていた。その為…：

ぐう〜

と可愛いらしい音になるのも仕方なかった。

「す、すみません！」

「ハハハ！まあ朝早くから作業してたからねえ。そろそろお昼だし何か食べに行こうか」

顔を真っ赤にしたウエンデイのお腹の音を合図に2人は昼食をと

りに街へと向かった。

「お？あれはユリスと綾斗。2人は何してるのかな？」

「雅也さん、また悪い顔してますよ…。」

市街地で昼食をとるべくお店を探していた2人はハンバーガー屋でユリスと綾斗が食事をしているところを発見した。

「よう綾斗にユリス。白昼堂々とデートか？」

「ば、バカを言うな一色！私はコイツに街を案内しているだけだ」

「そ、そうだよ雅也、俺がユリスにお願いしたんだよ」

雅也が定番ともいえる質問に慌てて答える2人。

「雅也さん、いきなり失礼ですよ！お二人共、すみません！」

いつも通りの雅也にウエンデイが代わりに謝罪する。

「? 雅也この子は?」

「ああ、2人は知らないか。中等部のウエンデイ・マーベルだ。俺の… あゝ遠い親戚だよ」

綾斗の質問にバレバレの嘘について返答する雅也。その返答を聞いてユリスが、

「その辺は探らないでおけ。こんな奴と一緒にいるのは大変だろう?」

「ま、まあ。はい…」

と、遠慮気味に答えるウエンデイ。

「俺の自己評価と周りの評価が思ったよりかなり違う件について!」

「まあまあ。それより雅也達は何してたの?」

雅也のリアクションをなだめ質問する綾斗。

「腹減ったからランチタイムだよ。そこにお2人さんがデートを…」

「だから違うと言っているだろう!」

「さあという訳で俺らも注文しに行こうかウエンデイ」

ユリスの怒りをスルーし雅也達はレジへと向かった。

「雅也は前からあんな調子なのかな？」

と苦笑いで話す綾斗。

「… ああ。ふざけた男だ。あれでも奴は一年前お前と同じく特待生として入ってきたのだ」

「雅也が？でも雅也が戦おうとしたところは見たことないな」

雅也とウエンデイが昼食を注文しに行った後、綾斗とユリスは雅也について話していた。

「お前は知らないのも無理はない。一色が決闘をしたのは奴が星導館に来てすぐの1度だけだ。」

「へえ。その決闘相手は誰だったの？」

「当時の星導館序列8位だ。今の私なら勝てない相手ではないが、決して簡単に勝てる奴でもなかった…。」

ユリスの声のトーンが少し低くなったのを察した綾斗。

「それで… 結果は？」

「序盤は一色が相手の攻撃を避けているだけで、ギャラリーからもブーイングが起きていた。だがそれから少し経ったときだった。」

ユリスの真剣な顔が一層深くなる。

「一色の姿が消えたかと思ったその瞬間、既に相手の校章は割られていた」

「… え？」

唐突な展開に驚く綾斗。因みにその決闘は序列変動無しの決闘で雅也は《冒頭の十二人》入りをしなかったという。

「特待生がそんな事をやれば周りの期待は上がるだろう。だが一色は何を思ったのか、それ以来一切の決闘を放棄し何でも屋を始めたのだ。」

勿論、最初は周りの評価は良くなかった。しかし活動するにつれ評価は上がっていき今に至るとい事だ。

「そんな事があつたんだ…」

雅也について自分は何も知らないのだなと実感する綾斗。

「本人抜きで話を進めるんじゃないよ」

そこへ再び2人の会話に割り込む声。案の定雅也だ。

「なにに俺の話？いやあ照れるなあ」

「盗み聞きか一色、趣味が悪いな。お前の遠い親戚とやらは一緒ではないのか」

そう指摘するユリス。しかし雅也は明るい表情で

「ウエンデイは別に並んでたらはぐれちやつてさあ。それにユリスも俺が趣味のイヤツなんて思つてないだろ？会話に割り込むキツカケ探してたんだよ。それと…」

雅也が喋るのを止め後ろを見る。ユリスと綾斗もそれにつられ視線を移す。そこには星導館序列9位 レスター・マクフェイル と取り巻き達が立っていた。

「ようユリス。また謎の襲撃者に襲われたらしいな」

「一色、なぜこいつを連れてきた…。」

「連れてきてないよ？気づいたら俺の後ろにいただけ」

「オレの話聞きやがれ！」

そうレスターは怒り雅也はそれをなだめる。

「あくはいはいレスターも落ち着けえ。その件について3人も何か知らない？」

雅也は少しでも情報を集めておきたいと思いレスターと取り巻きに質問する。

「ふんっ、知らねえな。」

その質問をバツサリ一刀両断するレスター。そんなレスターに雅也は

「へえ？実はあ何か知っててえ？それ隠して… まさかつ、レスターが犯人とか！」

「なんだと？ふざけるな一色！」

明らかな挑発をする雅也にいよいよ怒りが爆発したレスター。

「落ち着いて下さい！決闘の隙をうかがうような卑怯なマネ、レスターさんがするはずありません！」

「そうだよレスター、こんな奴の挑発にのっちゃ駄目だ！」

それを2人の取り巻きが必死になだめる。

「ぐぐぐ…！」

そして怒りが収まらない表情でレスターはその場を去っていった。

「ふう、まあた余計な恨みを買っちゃったかな。」

嵐が去ったかのように静かになったその場になんとも気の抜けた雅也の声。

「雅也も大変な商売してるんだね…。」

「恨まれない方がおかしいよこの商売は。それも覚悟の上さ…。」

綾斗の労いに当然と言った様子の雅也。

綾斗にはその目の深くに何か眠っているように見えた

実力

次の日の放課後。

雅也がクラス内に面白いネタが落ちてないかと教室を見渡すと、

「すまないが、今日は用事がある」

ユリスが綾斗にそう言つて教室を出ていくところだった。

「なんだ綾斗、またデートにでも誘つたのか？」

「ち、違うよ雅也。ただユリスの様子が何だか気になつて…」

「ふむ… 普段からユリスはあんな感じだと思ふんだが、確かに最近
は接しやすいイメージがあつたな。主に綾斗のお陰で。」

ニヤけながらそう答える雅也。

「雅也顔がニヤけてるよ… 俺は普通に接しているだけなんだけど
ね。」

流石に顔に出すぎていたのか、冷静にツツコム綾斗。

「んで綾斗はこれから何か用事があるのか？」

「うん。昨日の事をクローディアにも報告しておこうと思つてね。」

「あら、ごきげんよう。お二人共どうかしましたか？」

「俺は昨日また連中がちよつかいを出してきてさ。その事を報告に」

「俺は何か面白いこと無いかなどと思って。綾斗の周りはいつも退屈しないからねえ」

「人をトラブルメーカーみたいに言わないでよ雅也……」

綾斗と雅也は生徒会室に来ていた。

「ウフフ、一色くんも余り度が過ぎるといつ痛い目にあうか分かりませんよ？」

「クローディアがいうと妙に悪寒がするからやめてくれよ……」

「あはは……それでクローディア、襲撃の件なんだけど。犯人の目星がついたかもしれないんだ」

その綾斗の発言にクローディアと雅也は驚いた。

（一応特定はしといたけど、俺が調べる必要なかったかな……ん？）

雅也の微妙な表情の変化を見たクローディアは問いかける。

「どうかしましたか一色君。何か気になることが？」

「いや、ユリスはこの事気付いてんのかなって」

「うん。多分そうだと思うよ」

綾斗が答える。その返答に表情が険しくなる雅也。

「ユリス用事があるってどっか行ったよな。不味くないか？」

「ツ！とにかくまずはユリスを探しましょう。」

クローディアもこの状況には顔色を変えて空間ウィンドウを開いて言った。

（ユリスを潰そうとしてんのか…。今までの襲撃方法からして人目につかないところは…。）

その時、綾斗の携帯端末に紗夜から連絡が入った。どうやら道に迷ったから助けてということだった。

「ごめん。今はユリスのほうで手一杯で…」

『リースフェルト？それならさつき見かけたような…。』

綾斗と紗夜のやり取りを聞いていた雅也が綾斗の後ろから顔を出す。

「沙々宮、周りの景色映してくれないか？」

雅也の頼みに従い紗夜が景色を映し出すと、そこは雅也にとっては馴染みのある景色だった。

「再開発エリアの外れですね。一色君、綾斗の案内頼めますか？」

クローディアに言われて雅也は綾斗を連れてその場所へと向かった。

「なんでユリスはなんにも言ってくれなかったんだろう…。」

再開発エリアへの道中、綾斗が呟いた言葉。雅也はその言葉に、いつもとは違う真面目な顔で

「お前を巻き込みたくなかったんだろねえ。ユリスなりに綾斗を守りたかったんだよ」

「ユリスが俺を―？」

その時綾斗の顔が決意の表情に満ちていくのを見た雅也は

（綾斗、君にはつくづく驚かされるよ。やっぱついてきて正解だったなあ…。）

真面目な表情の裏に子供のような笑いを心の中で作っていた。

再開発エリアの廃ビル

綾斗はユリスがサイラスと戦っているところを発見し、サイラスの擬形体を相手にしていた。

「次は本気でいかせてもらいますよ…！」

とサイラスが言い擬形体達が綾斗を攻撃する。

「よくかわしますね。ですが逃げてばかりでいいのですか？」

「そうだね、今ので充分あなたの能力もわかったし。それに…」

綾斗が擬形体から離れた瞬間、

パキイン

その擬形体の一体が氷漬けにされた。

「綾斗く。二手に分かれて探そうって言って自分だけ美味しいところ持ってくなよー！」

そう言いながら雅也が綾斗の横に現れた。

「別に美味しいところではないよねこの状況… それに今の氷は雅也が

「？」

「ああ、人前で戦うのは久しぶりだなあ。んで、姫様を抱えながら美味しいところではないなんてよく言えるな」

顔を赤くするユリスと綾斗に普段通りのニヤけ顔で答える雅也。

「僕を無視してお喋りとは随分と余裕ですね一色君。たかが一人増えたところでこの百を超える擬形体をどうにかできるとでも？」

サイラスが雅也の登場に少々驚きながらもそう言う。

それに対し雅也はいつもの声のトーンで、

「たかが一人増えなくても綾斗だけでなんとかかてきると思うんだけどなあ。俺は保険みたいなもんだよ。―でも」

いつもとは違う冷たい空気を纏って言った。

「久しぶりに軽い運動くらいはしなないとなあ」

雅也の普段とは違う気迫に押されたサイラスは、

「そ、その余裕がいつまで持つか楽しみですねえ！」

その気迫をかき消すように大声を出して擬形体を操り出した。それを見た雅也は戦闘の構えをとった。

「アイスメイク… 《氷の槍》！」

雅也の前に氷の槍が現れ擬形体目掛けて飛んでいき、数体の擬形体を貫いた。

「アルルカンとの擬形体と聞いて少し期待したんだが案外脆いなあ。

アイスメイク：：《大槌兵》！」

残念といった表情で雅也は氷のハンマーを人形に落とし攻撃する。

少し離れた場所で綾斗も襲いかかる擬形体を《黒炉の魔剣》で倒していた。

「あれが一色の力か。大したものだな」

綾斗に抱えられているユリスも思わず感嘆の声を漏らした。

「そうだね。雅也の戦闘を見られるのはレアだろうし、確かにじっくり見てみたいけどこっちも早く片付けようか」

更に擬形体を倒す速度をあげる綾斗。それに触発された雅也は、

(やっぱ黒炉の魔剣は凄いなあ。それを使う綾斗もかなりのものだし：：こりゃ俺も少し張り切るかな)

「アイスメイク：：限界突破！」

雅也の周りに大量の氷の剣が造形される。そして

「一勢乱舞！」

大量の氷の剣が擬形体を斬っていく。とても氷の剣とは思えない切れ味で擬形体をの群れを一瞬にして消し去っていた。

「馬鹿な…こんな… たった二人に！」

目の前で繰り広げられたスクラップショーにサイラスは尻餅をついていた。

「たった二人、されど二人なんだぜ。いい教訓になったなサイラス」

「こつちも片付いたよ雅也。さて、ゲームはおしまいだよサイラス」

「ま、まだ僕には奥の手がある！」

そう言ってサイラスは腕を振ると後ろの瓦礫の山から大きな擬形体が飛び出してきた。

「は、ハハハ！やってしまええ！」

サイラスの指示通りに二人に攻撃を仕掛ける巨大擬形体。

しかし二人はいつもの緊張感の無い雰囲気で言葉を交わす。

「諦めが悪いなあ。綾斗、任せるよ」

「うん緊張感ゼロだね。ふう…天霧辰明流中伝『九牙太刀』！」

綾斗が《黒炉の魔剣》で巨大な擬形体を攻撃する。

（速い！力が見てみたくて任せただけど、これは星武祭で当たったら大変だな…）

先の心配をする雅也の前で綾斗によって壊された擬形体が崩れていった。

その状況を見たサイラスは半泣きで残骸の中から人形に捕まり、吹き抜けから逃走を図っていた。

「往生際が悪いなあ。雅也、ユリスを頼めるかな？」

「追いかけるのか？間に合うの？」

「微妙なところだね…。」

「だったら私の出番だな。一色にこれ以上頼るのも癪に障るのでな。

咲き誇れ―極楽鳥の燈翼！―

ユリスがそう言って綾斗の背中から焰の翼を広げた。

「酷いなユリス… ならあいつは二人に任せるよ、俺はクローディアに連絡しとくから。頼んだよ」

雅也はそう言って二人が吹き抜けから勢いよく飛んでいくのを見届けた。

（やっぱ綾斗に付いてきてよかったよ… 星武祭が楽しみだなあ）

携帯端末を取り出しながら雅也は数ヶ月後の祭りを思い顔を綻ばせた。

期待と失望

サイラスによる襲撃事件から二週間後。綾斗とユリスがタツグパートナーを組み《鳳凰星武祭》への出場を決めたと聞いて雅也とウエンデイは二人のトレーニングの相手をしていた。

「いやあ綾斗とユリスが組むとなると当たった時相当骨が折れそうだよ」

「それを雅也は一人で凌いで相手してるんだから雅也も凄いよ」

今は休憩中でそれぞれの連携や課題について話していた。

「二人にはバレたけどウエンデイは攻撃系の魔法が苦手だね。サポーター魔法を使って俺が二人相手にする作戦なんだよ」

「私も攻撃魔法が使えれば…」

「お、俺が言い出した作戦だから、それに俺の願いのために手伝ってくれてるんだから感謝以外の言葉が無いよ」

「む？そういうえば一色の願いは何なのだ？」

ユリスはその疑問を口にする。

「俺は…ふむ…」

雅也が暫くわざとらしく悩むフリをした後、

「本戦で二人と戦う時にでも教えようかね」

いつもの企み顔で答えるのであった。

翌日

「アルルカントかあ。俺が他学園について知ってる事は皆知ってることだけだし、夜吹の方が詳しいぞ」

あの後雅也とウエンデイがトレーニングルームを去った後、アルルカントの生徒が綾斗達を訪ねて来たらしい。

（情報屋としてある程度は詳しいが。もしペラペラ喋ろうもんなら綾斗も怪しがるだろうし・・・ここは夜吹に任せようか）

そう伝えると雅也は食堂へと向かった。

その途中、

「落し物♪落し物♪落し物はどこですかあ〜」

食堂へ向かう途中、雅也は何でも屋の仕事としてとある生徒の落し物探していた。

「落しm… なんだありや」

ふと雅也が顔を上げると何やら人が集まっていた。

（あれは綾斗と… 刀藤さん？ 何であの二人が決闘を？）

雅也が見たものは先程教室で別れた綾斗と星導館学園序列一位の刀藤綺凜だった。

『それで序列一位の子と戦って天霧君が負けちゃったんだ』

「うん、やっぱり序列一位は伊達じゃないねえ。」

再開発エリアのアジト

あの後、綺凜との決闘で敗れた綾斗に事情を聞いた雅也。

ユリスに叱られていたようだが綾斗にとって綺凜との決闘はいい経験になっただろうと雅也は思った。

『それで十三歳なんだよね？ 凄いなあ』

「シルヴィアも似たようなもんだろ…。てか、またこんな遅くに起きてていいのかよ」

以前シルヴィアから連絡があつてから何ヶ月か経つた今日。

それ以来何があつたかなど互いに話していると気付けばかなり話し込んでいた。

『定期的に雅也君の声が聞きたくてね。ウエンデイちゃんも元気かな？』

「ウエンデイは今日は来てないよ。今回は俺だけで済ませれたからね」

今日雅也がアジトに来たのは鳳凰星武祭に出場する選手のデータ集めの為だった。

「それに俺の声が聞きたいなら録音でもして流せばよくね？」

『そういう事じゃないよ！』

「うわっ！」

シルヴィアがいきなり大声を出したので雅也は驚いた。

『鈍感…』

雅也の冗談に本気に怒つたシルヴィアは今度は聞こえないように小さい声で言った。のだが…

「一応言つとくが聞こえてんぞ。俺はそこらのご老人や難聴系主人公じゃないから」

『そこは聞こえてないふりをしてよお…』

「思ったことを口に出して伝えられるのはシルヴィアとウエンディくらいだな。それに」

「… 気持ちは分かっているつもりだから」

少し照れくさそうな声で雅也は言った。

『… うん！』

↳数分後↳

「それじゃ、そろそろ切るぞ」

『うん！またね！』

そういつて通話を切った雅也は、開きっぱなしの空間ウィンドウを閉じて部屋の電気を消した。

「さて俺も寮に戻るかあ」

コートを着て雅也はアジトの部屋から出た。

いつも通り慎重に、入り組んだ道を進んでいた。その瞬間、

ぞわりと

後ろから何か嫌な物が迫ってくるのを感じた。

(なんだッ!?)

突然、煙のようなもので出来た腕が大量に襲いかかってきた。雅也は間一髪という所でその腕を躲しきった。

(危なかったあ…こんな量の星辰力…一体何者なんだよ…)

冷や汗を拭って雅也は攻撃の飛んできた方を見る。そこには1人の人間がこちらを見つめて立っていた。

(あいつは…《孤毒の魔女》!)

そこにはレヴォルフ黒学院序列一位 オーフエリア・ランドルフエンが先程の煙を纏わせていた。

「なぜ俺を襲う?」

「仕事だからよ」

そう言つてオーフエリアは再び雅也に攻撃する。

雅也の頭にはレヴォルフの生徒会長の事が浮かんでいた。

(デイルクか…俺を潰しに来たのか?それとも…つと!)

が、その考えごと大量の煙の腕が雅也を薙ぎ払おうとする。それもギリギリで躲す雅也。すると、雅也の足元に僅かに生えていた植物が突如として枯れだした。

（あれが瘴気か、とんでもないなあ。でもここでやられる訳にはいかないからね！）

オーフェリアから距離を取ると雅也も星辰力を集中させる。

（この狭い通路なら躲せないだろ！火竜の咆哮！）

雅也の口から炎のブレスが放たれる。狭い通路を炎が埋め尽くし辺りは火の海になった。

オーフェリアはそれを瘴気で自身を覆うように防いだ。そして炎が収まったところでオーフェリアは雅也へと視線を移す。だがそこには雅也の姿は無かった。

（喰らいやがれ！火竜の鉄拳！）

攻撃を防がれると予想していた雅也は、ブレスを放ってすぐに上へ跳躍し、その炎によりできた上の死角から攻撃した。

しかしそれすらもオーフェリアは瘴気の腕をぶつけて雅也の攻撃を押し返す。

「ぐあッ…」

想定以上のパワーに雅也は吹き飛ばされた。空中で態勢を立て直すが攻撃した際に瘴気に触れすぎたのか、少しよろけてしまう。

(流石はシルヴィアに勝っただけのことはあるか。出し惜しみしてる場合じゃ…)

「今こつちからでけえ音がしたぞ！」

少し離れたところから第三者の声があった。その声は雅也の望んだ展開だった。

(警備隊… やつと来たかあ…)

雅也は最初から時間を稼いで騒ぎを嗅ぎつけた警備隊を呼び、その隙に逃げるといふ作戦だった。

(逃げるは恥だが役に立つ、ってね。命懸けの鬼ごっこで逃げない奴はいないさ。ここはありがたく…)

雅也はしてやったと思いきやオーフェアの反応を見た。だがその表情は雅也にとって忘れられない、昔の記憶と確かに同じだった。

(なんでこいつがこの顔してんだよ、その顔は…)

初戦

いつの日か見たあの顔…

期待… 失望…

なんだ… 何を期待した？俺の何処に失望した…

何で俺はあの顔を追いかけてたんだ…？

それは何時からだっただっけ…

「—さ。—さん！」

誰だ… 何で俺を… こんな俺を…

「雅也さん！」

「んあ… あ？ウエンディ？」

「開会式中ですよ、立ちながら寝ないでください！」

現在は星武祭の開会式がシリウスドームにて行われていた。雅也は式特有の長い話に飽きて立ちながら眠っていたようだ。

2人は周りの生徒になるべく聞こえないように小声で会話する。

「この前の疲れがまだ取れてないみたいだねえ、黙って逃げてりや良かったな」

「それに暫くはあの場所、警備隊が警戒して近寄れませんし…」

雅也がオーフェアとの戦闘から逃げ切った後、警備隊が到着しアジト付近が厳重警戒となったので暫くはアジトに行けなくなってしまう。

(まあ星武祭始まるし、あそこに行く用事も特に無いからよかつたけ

ど…でも…)

雅也の頭にはあの時、オーフェリアが見せた表情が焼き付いていた。

(なんなんだよ… 奴とは初対面だったのに… クソツ)

静かな苛立ちが心の中で募る。

だがその苛立ちは会場の歓声によって思考の隅に追いやられた。辺りを見渡すと周りの他の生徒たちが引き上げて行く。

「開会式終わったかあゝ。んー！」

人目を気にせずに伸びをかます雅也。

「雅也さん、私達の試合は今日からですよ。移動しましょう！」

ウエンデイの元気に先程の苛立ちは頭の隅で溶けてしまったようだ。それ程彼女の気合が頼もしい。

「お？ウエンデイ、気合入ってるね」

「厳しい戦いになると思いますが、雅也さんの力になる為にここへ来ましたから！」

(本当に頼もしいねえ。こりやますます気合が入ってくるねえ)

これから始まる挑戦に雅也は改めて気持ちを高ぶらせる。

「それじゃあ、行こうか！」

第一試合

雅也達の相手はクインヴェールのタッグだ。一人が前衛の槍型の武器、もう一人の後衛は二丁拳銃だ。

「ウエンデイ、今回は作戦Aでいこう」

少しワクワクした表情でウエンデイに同意を求めるが、

「さ、作戦A!? そんなのありましたっけ…?」

「いや無いけど。それっぽかったよね？」

それを聞いて安心と呆れのため息を一つついたウエンデイは相手の二人を向き言った。

「私が雅也さんにサポート魔法をかける。後は雅也さんが無双する、ですよね?」

「そう、俺無双作戦!なんか作戦たてるとテンションあがるなあ」

「いつも通りで安心しました… それより」

「うん。始まるね…」

観客の歓声が大きくなる。

この舞台に立つのは雅也もウエンデイも初めてだ。歓声の大きさに圧倒されかけるも目を閉じ雅也は集中する。

(長かった、ここまで。まだ届いてないけど… やつと探し出したんだ…)

(あの人に答えを聞く為に… やるんだ！)

『試合開始！』

「攻撃力倍化《イルアーム》、速度倍化《イルバーニア》 付加！」

試合開始の音声が響くと同時にウエンデイは雅也に付加魔法をかける。それを見て尚、相手の二人はどうかやらこちらの出方を伺っているようだ。

(この付加魔法も久しぶりだなあ。さて、そんなに悠長に構えていいのかなッ！)

そうした雅也は相手に真っ直ぐ突っ込んでいく。だが周りには雅也の姿が消えとてつもない勢いで二人に近づいたように見えていた。

相手の前衛がなんとか反応して前に出る。だが武器を構える前には雅也が懐に潜り込んでいた。

「アイスメイク… 《氷魔剣》！」

氷の剣を一瞬で作り出し前衛の校章を十字に切り裂いた。次に雅也は後衛の相手に向かって行く。まだ試合が始まってから十秒も経っていないので相手は雅也の速さに目が慣れる暇はなかった。

「はああああ！」

雅也の気合の籠った声と共に氷の剣が後衛の校章を真っ二つに割った。

『試合終了！勝者、一色雅也&ウエンディ・マーベル！』

その声が聞こえた瞬間、会場中が大歓声に包まれた。

思惑

「ん〜！五回戦突破！。正直危なかつたあ…。」

「相手も各学園の序列の上位ばかりですし、分かっているいましたけど…。」

初戦を圧倒的な強さで突破した雅也とウエンデイのペアだったが、やはり試合を重ねる毎に相手も強くなっていったため何とか勝ち進めているという状況だった。

「これはそろそろ氷の魔法だけじゃ厳しいね…。」

「いよいよですね？でも確かにこれ以上は隠しては厳しいでしょうし…。」

雅也はこれまでの試合を氷魔法とウエンデイの付加魔法で突破してきた。実力を隠しておけば後々有利になるからだ。

だが、それも自分達の相手の実力や他のペアの試合を見れば限界があると感じ始めていた。

「綾斗達や刀藤さんと沙々宮、それにアルルカントの二体、誰と当たっても苦戦は免れないだろうしね」

「それに私たちは大会一のダークホースとまで言われていますし、今ま

で以上に相手も対策をしていると思います」

二人と序列入すらしていないペアが準々決勝まで勝ち進んでくれば当然注目を集める。そうなれば相手も疑り深く戦術を考えるだろう。

その為、氷魔法だけではここから先厳しいだろうという判断だった。

「? 面白いえばウエンディは優勝したら何を叶えてもらうの?」

「えっ!? 突然ですね... そうですね... 私の望みは雅也さんの力になる事ですし...」

「君は無欲な若者だ、本当に良い子に育ったよお... グスツ」

わざとらしく涙声で雅也が答える。

だがそんな雅也の茶番は真剣な顔つきで考えるウエンディには届いていないようだった。

(私の望み... 優勝したら雅也さんの力になる必要も無くなるのかな...?)

次の日

(腹減ったなく。明日の試合の事も考えたいし、静かなあの店でいいかなあ)

昼食をとるべく雅也は穴場の店へと向かった。

のだが…

「何故一色がここに来たのだ。私は呼んでいないぞ?」

「いやいや、俺も呼ばれたつもりは無いけどね? たまたま同じ店に入っただけだよお」

雅也が入った店には綾斗とユリス、そしてユリスの隣にはメイド服の少女が座っていた。

「フローラちゃんだっけ? はじめまして、ユリスと綾斗の友達の一色雅也です!」

「あい! よろしくお願いします!」

「誰がお前の友人だ。フローラ、こいつはただの知り合いだ。」

「酷い! 友達少ない俺の見栄を壊さないで!」

そう言って雅也は空いていた綾斗の隣に崩れるように座った。

「雅也はお昼を食べに来たの？」

「お、おう、そうだよな。綾斗は友達だよな……」

「大分参ってるみたいだね。質問の答えになってないよ」

「店員さん……友達一人下さい……」

「無理な注文をするな一色！」

四人の空間がすっかり雅也のペースになりつつあったその時、

「あ、あのお……ちよつといいでしょうか……？」

店員の注意でも、四人のものでも無い弱々しい声が各々の耳に届いた。

「それでなんでめえまで付いてきやがった。一色」

「レヴォルフの会長との接触の機会なんて滅多にないからねえ。それ

に聞きたいこともあるし」

雅也、綾斗、ユリスがデイルクの秘書に案内され、止まっていた車に乗り込んだ。

綾斗が先日の対戦相手、イレーネに頼み実現したこの場。綾斗の姉の失踪の件について。それを聞いた綾斗が衝撃を受けていた。

ユリスに綾斗の事を頼み、先に車から降りてもらったところで改めてデイルクが雅也に吐き捨てた。

「てめえと話すことなんざねえ。さっさと降りやがれ」

「こつちもネタ無しにてめえと話す程情報薄くはねえよ」

綾斗達がいた先程とは別人のように雅也の口調が変わった。

「ただの学園の何でも屋が俺の知らない情報を持っていると思えっのか？」

「… 黒情報屋について、とかはどうだ？」

その瞬間、デイルクの纏っていた雰囲気格段に深く黒いものになっていく。

「…何を知ってやがる」

「たまたま奴のアジトを見つけてなあ。だが俺の力じゃあ奴のアジトの情報の解析が困難でな。俺が場所を伝えてやるからお前らで情報を解析して俺にも共有して欲しいって事だ。お宅らもあの情報屋には迷惑してんだろ？」

わざとらしく煽るように話す雅也。勿論嘘だ。

先日の孤毒の魔女の襲撃から察するに、デイルクも黒情報屋の持っている情報が気になっているのだろう。

雅也は偽の情報を掴ませ、デイルクの懐を探ろうとしていた。

少しの沈黙の後デイルクが口を開いた。

「いいぜ。だがもし情報を漏らせば…」

「わかってらあ。学園じゃあ守秘義務を売りにしてんだ」

そう言うと雅也は車から降りて寮へと帰って行った。

心配と信頼

準々決勝控え室――

雅也の携帯が着信を鳴らした。

「はい、こちら世界中が注目しているであろう準々決勝の控え室です」

「分かってるよ雅也くん。準備は大丈夫？」

雅也の携帯からはシルヴィアの声が聞こえた。

「バッチリ……と言っても相手が相手だしね。どれだけやっても完璧にはならないよ」

「相手は同じ星導館の刀藤さんと沙々宮さんのペアだったよね」

「苦戦間違いなし。でもそんな事は大会に出るって決めた時から覚悟してたさ」

「……無理しないでね」

彼女のいつもの明るさが消える。それを心配させまいと雅也は少し大きめの声で話す。

「大丈夫だよ。もうあの時みたいながキじゃないんだから。っと、ウエンデイが待ってるからもう切るぞ」

「うん… 応援してるからね！」

そう言つて雅也は早々と通話を切つて控え室を後にする。

シルヴィアの優しさが、心配が雅也には痛いほど分かっている。故にそれを断つたためにも勝たなければならぬ。

(無理するな… か。願いが叶えば無理しなくて済むだろうけど、せめてあと三試合は許してくれよ…)

心の中で申し訳なく思いながら会場への廊下を進んでいると、ウエンデイが先に待っていた。

「雅也さん、大丈夫ですか？」

「皆心配してくれるのはありがたい事なんだけど俺ってそんなに危なっかしいかなあ」

軽く落ち込む素振りを見せる雅也にウエンデイは笑顔で頷く。

「はい。シルヴィアさんから雅也さんのことを見張つてと頼まれましたから！」

「見張り!?俺は犯罪者か何か!?!」

「それくらい危なっかしいという事です。シルヴィアさんも私も心配なんです」

「とは言つてもここまで来たら皆無茶しないと勝てないだろうからね。そこは目を瞑ってね」

会場の騒がしい音が近付いてくる。

「あの、雅也さんー！」

「ん？」

突然呼ばれた雅也は首だけ後ろを振り返る。

「あの…えっと…」

雅也は彼女が喋るのを黙って待つ。

どうした？と急かせば焦ってしまい逆効果になる。そのくらいの事は分かる、雅也は彼女の事を理解しているつもりだ。

だから雅也は彼女を信頼している。

しかしウエンディは諦めた様子で声を絞り出した。

「すみません…なんでもないです…」

「そ、そっか」

正直、その答えは意外だったので少し戸惑ってしまった雅也は、咄嗟にフォローを入れる。

「ん、あんまり思い詰めたら駄目だよ？あと3回勝つだけ。俺はそ

う考えてるから」

「それじゃあ頼りにしてるよ！」

「…はい！」

そう言つてウエンデイと雅也は試合会場へと入つていった。

初手

『さあついに鳳凰星武祭も準々決勝！どのペアも強者揃いの鳳凰星武祭！それでは早速、ここまで勝ち上がってきたペアの入場だあ！』

会場のボルテージは既に最高潮。まだ準々決勝にも関わらず実況にもかなり熱がこもっているようだ。

『まずは大会一のダークホース、星導館の一色雅也&ウエンディ・マーベルペア！』

片方のゲートから雅也とウエンディがステージに現れる。

『そしてそして反対側からはこちらも同じく星導館、刀藤綺凜&沙々宮紗夜ペア！』

もう片方のゲートからは綺凜と紗夜が現れた。

『ここまで二組とも危なげなく勝ち進み、無傷同士の試合となつていきます！』

『これは大会屈指の好カードになりそうですね。沙々宮刀藤ペアはここまでの試合秒殺ながら高度な連携を取りながら勝ち進んできました。対する一色ウエンディペアはこちらも秒殺ながら、全て一色選手が一人で倒してきました』

『と言うことは、一色選手は一人でどのように二人を相手するかがポイントですね！』

『そうですね。ウエンディ選手は付加魔法を使いますが、戦闘には参加していませんでしたのでサポートに専念するかどうかも鍵ですね』

「や、やっぱり凄い歓声ですね」
「うん。でもそれ以上に…」

雅也の視線の先には、紗夜と綺凜が同じく立っている。

しかし、その二人共明らかに今までの相手とは格が違う。雅也はステージに足を踏み入れた瞬間にそれを感じていた。だから会場の歓声など雅也には余り関係無かった。

（正直勝てるなんてとても自信を持って言えないな… 向こうの連携は出場ペアでもかなりの精度だ。でも、気持ちで負けてちゃアあの二人にはとても敵わない）

「今まで通りの作戦でいこう。ウエンデイが付加魔法をかけてあとは俺が相手する。ウエンデイはやられないように上手く立ち回ってね」

「…はい」

それだけ伝え雅也は目を瞑り集中する。その瞬間の相方の表情を見逃したまま…

（まずは沙々宮から倒さないで。遠距離を躲しながら刀藤さんと一対一は厳しいからね。後は…）

頭の中で作戦を練る。ウエンデイには今まであまり無理をさせないように行き当たりばったりと伝えていたが毎試合、雅也はこうやって頭の中で作戦を立てていた。

「…よし」

作戦も組み立て終わり、目を開き相手を見据える。彼女達もそれを見てこちらを真っ直ぐに見つめる。

「沙々宮、刀藤さん。この試合、勝たせてもらうよ！」

「負けない」

「全力でお相手します！」

『さあ両ペア準備が整ったようです！それでは鳳凰星武祭、準々決勝… 試合開始！』

（いつも通り、ウエンデイの付加魔法がかかった瞬間に速攻で決めるッ！）

雅也は地面を蹴り飛び出す。

「付加魔法！攻撃——」∴∴ バースト」

次の瞬間、視界が巨大な光弾に埋め尽くされ、雅也とウエンディは爆発音と煙に飲み込まれていた。

その道は何処へ

「よーし、今日は新しい魔法を教えよう！」

元気な声、どこか幼さが残っている男の声。

「新しい魔法？ 炎と氷だけじゃダメなの？」

疑問の声。疑いではなく、ただただ真っ直ぐな疑問。

「お前には沢山の魔法を使える力があるからなあ。折角ならいっぱい使えた方がいいだろう？」

「… たしかに！ じゃあ次は何を教えてくださいの！」

「おうおう元気でよろしい！ 次はだな…」

懐かしいなあ…

あの時、『』が魔法を教えてくださいなかつたら…

ここには居ないんだろうな…

「つあああぶねえ！」

鳳凰星武祭準々決勝。

開始数秒で起こった爆煙の中から、一つの声がそこに人が立っていることを証明していた。

『いきなりの沙々宮選手の先制攻撃！しかし一色選手もこれを凌いだア！』

（あっちも速攻で決めようとしてたのか。とっさに炎で防がなかったらやられてたなあ……）

「むう、奇襲は失敗……」

「一色先輩、流石ですね。でも今の魔法は……？」

「リースフェルトの魔法に質が似てた……」

攻撃を防いだ雅也の使った魔法の質は、今までの氷魔法とは違うことを二人は感じていた。

（警戒して突っ込んでこない。流石に気付かれたよねえ……）

雅也の氷魔法では先の攻撃の威力は耐えれなかった。咄嗟に雅也はそれを感じ取り炎魔法をぶつけて何とか凌いでいた。

(そっちから仕掛けないなら…)

「ウエンデイ！早く付加魔法を！」

「は、はい！」

そう言つてウエンデイが雅也に魔法をかける。それを見た紗夜と綺凜は構えなおす。

「綺凜、一色がまだ何か隠しているかもしれない。気を付けろ」

「はい！」

綺凜はそう言つて紗夜の前に出る。

「刀藤さんが相手かな？遠慮なくいかせてもらおうよッ！」

そして先程と同じように地面を蹴り雅也は飛び出す。拳に炎を纏わせ、今度は真っ直ぐに綺凜を狙つて。

「火竜の…！」

(来るっ！)

綺凜は雅也を迎え撃つ為、刀を握る手に力を入れる。そして二人がぶつからんばかりの距離になったその瞬間、

「えっ!？」

雅也はもう一つ加速、ひらりと綺凜をかわし紗夜へと走り抜けた。

『フェイントだあ!これは刀藤選手不意を突かれた!』

会場や実況、綺凜の不意を完全に突いた。

「火竜の鉄拳!」

付加魔法の効果もあり綺凜を完全にかわし紗夜に接近をした雅也。改めて全力で拳に星辰力を込める。

だが更に会場全体がどよめいた。

(この至近距離でかよっ!?)

「…どどーん」

わずか数メートルという距離で紗夜は巨大なヴァルデンホルトか

ら光弾を撃ちだした。

ドゴオン、という爆音と共に再び視界が爆煙で埋め尽くされる。とてつもない爆風に顔を庇いつつ思考を巡らす。

(力負けはしなかった…。でも今の一発に星辰力を使いすぎたかなあ。それに沙々宮のヤツ、あいっただけ動揺せずに撃ってきた…。もうあの手は通じないか…。)

その爆炎の中突然、雅也は背後からの気配を感じた。

煙の中の雅也の星辰力を見つけた綺凜が雅也に襲いかかってくる。雅也は休む暇もなく体を動かす。

「はあっ！」

「ぐッ！」

その攻撃を何とか躲した雅也から思わず呻き声のようなものが飛び出す。

綺凜から距離をとった雅也は、自身の制服が少し斬られている事に危機感を覚えた。

(危なかったなあ。隙のない連続攻撃、やっぱりトップレベルだね。でもそれより…。)

チラリと視線をパートナーのウエンディへと移す。それを察してウエンディは付加魔法を雅也にかけ直した。が、

(魔法の質が落ちてる…。連日の戦闘が響いてるのか?)

彼女は元々戦いが得意ではない。というのは直接的な戦闘系魔法を使えないというのと、優しい性格故に戦闘経験が少なく、戦闘続きの数日に、星辰力が回復しきれていなかったのだろう。

(不味い状況だなあ。二人がウエンデイを狙わないのは今の俺でも十分なチャンスがある、相手に出来ると分かっているからか…。ウエンデイにこれ以上無茶させれないし俺が踏ん張るしか…。)

雅也はまた「一人」で思考を巡らす。

この考え方が敗北の道だと気付かぬまま…

本心

『おおっとー！一色選手これもギリギリでかわしたア！』

試合が始まって既に数十分が経っているのにも関わらず、会場の歓声や実況の興奮は下がらない。

雅也もまた、この状況を打破しようと一人で焦っていた。

（クソツ、避けるので精一杯だ… 体力じゃなくて動きのキレが悪くなつてやがる！）

試合開始直後は押していた雅也だが、今は相手の攻撃をかわすのが精一杯で攻撃に回れていなかった。

（どうにかしないと、このままじゃジリ貧だ——）

俺はこのまま負けるのか？

頭にそんな事が過る。試合前までは考えもしなかった事。

ここで終わる訳には…！

「はあああ！」

綺凜と紗夜の攻撃を無理矢理躲しながら一気に星辰力を高める雅也。

「!? 綺凜下がって!」

「紗夜さん、まさかあれを迎え撃つんですか!?!」

この戦闘で一番の威力の攻撃が来ると察した紗夜も迎撃体勢をとる。

(俺が今出せる最高火力の攻撃だツ!)

そして――

「滅竜奥義 『紅蓮爆炎刃』!」

「出力最大、『フルバースト』!」

炎と光弾が真正面からぶつかり合う。その衝撃は会場の客席よりも更にその外、会場外まで振動が伝わった。

ステージはドーム状に爆煙に埋め尽くされ試合を中継していたカメラでさえ何も映し出せていなかった。

「ハア、ハア…」

ありったけの星辰力を使いきった雅也は激しい息切れを起こしながらも、紗夜達のいた方を睨みつけるように見ていた。

(炎魔法自体久しぶりだったけど、こんなに燃費が悪かったっけか…
一発撃っただけでもう限界だ…)

思わず意識を手放しそうになったが何とか膝をつき耐える。

(おっと…でもこれで…)

ふっと胸をなで下ろす雅也。

しかしその見つめる先には晴れた煙の中から二人の姿が現れた。

(まさかッあれを耐えたのか!?)

二人も決して無事ではない。制服の所々が焼け、紗夜の大砲のような銃もはや使い物にはならないくらいに壊れていた。だが致命傷にはならなかったようだ。

咄嗟に立ち上がろうとした雅也だが既に星辰力も底を尽き、上手く立ち上がれない。

紗夜と綺凜がこちらへ向かってくる。あくまでも油断はせず確実に仕留めるつもりだ。

(クソツ、まだやれるだろ… 相手が立ってるんだ…)

足がふらつき意識が朦朧とする。

「先には倒れられつかよおお！」

自分を鼓舞するように叫び立ち上がった雅也も二人へ突っ込んでいく。

綺凜の刀を躲そうとする。だが先のようなキレなど微塵も見当たらず直撃とはいかずとも食らってしまう。

「ぐうツ!？」

反撃をするが、その拳にはもう纏わせる炎も何かを創る氷も無く、キレの悪い攻撃が空を切る。

(また、だ。大技撃つ前と同じ… 限界以前に魔法を使おうとすると、どンドン沼にハマったように動けなくなる…)

何とか綺凜の猛攻を凌ぐも、背後からの紗夜の煌式武装の攻撃を受ける。

(ぐうツ…)

もはや声すら出せないような状態。意識があるのが奇跡だと会場の誰もが思っていた。

そこへ綺凜が目の前まで迫り、紗夜の光弾も雅也の校章を狙い寸分の狂いもなく放たれた。

(届かなかった…)

足がふらつく。

(必死に手を伸ばした…)

これが精一杯。

出来ることはやった――

だから悔いはない…。

「天竜の――咆哮！」

そんな考えごと吹き飛ばすような暴風が雅也の目の前を横切り、綺麗と光弾を吹き飛ばしていった。

自身の後ろを振り返る雅也。

あれは…誰だ…

ずっと俺の後ろに居た…

彼女は…あんなに強かったか？

あの子はもう…

「雅也さん！」

突然の出来事に会場や雅也すら呆気にとられていた。だがそんな事はお構い無しにウエンデイが雅也に歩み寄る。

「あっ…」

何とも抜けた声を出してしまう雅也。

「何で一人で戦ってるんですか！」

一人？いや、お前はずっと…

「…？違う…俺は、お前を頼って」

ずっと俺の後ろに居て助けてくれたじゃないか

「違わないです！なら何で私に攻撃を手伝えと言わないんですか！」

「それはお前が戦うのが苦手で、お前まで俺の都合で傷ついて欲しくなかったから！」

本心だ。ここまで感情的になる事なんて数年ぶりだから

「そんなの頼られてない！本当に頼られてるなら私は、あなたの後ろになんか居ない！」

パリンッ

ガラスが割るような音が

自分の中でから聞こえた。

俺は――

自分の都合で――

本当は彼女の気持ちなんて考えてなかった――？

彼女が躊躇って言えないのを言い訳に勝手に決めつけて、自分に言い聞かせてただけ――

「私は！雅也さんの『隣』で恩返しがしたいんです！」

ああ――そうか

逃げてきた結果がこのザマだ。

大切な存在ほど、黙って、騙して、利用して。

独りじゃない気になって、肝心なことは目を逸らしてた。

「…一人じゃ勝てない。心のどつかではわかってたよ。俺の我儘に付き合わせてるんだから。せめて大会はなんて…」

力が湧いてくる。不思議だ。

「でもダメっぽいんだ。だから…」

一人じゃない。

隣にこんな頼れるパートナーがいるんだ。

「もっと俺の我儘に付き合ってもらっていいかな？」

「っ！はいっ！」

紛れもない二人の本心。そこに遠慮など無かった。

我儘と覚悟

鳳凰星武祭準々決勝

後に、近年稀に見る激闘とまで言われる試合にも終わりが近づいていた。

「早速だけど、三つほど我儘を聞いてくれないかな？」

「いきなり三つもですか。でも、私に手伝える事なら！」

苦笑いで雅也に手を差し伸べ立ち上がるのを助けるウエンデイ。

「じゃあ一つ目。ここから先の準決勝、決勝も俺の隣で戦ってくれるかな？」

「当たり前です。もう後ろで見てるだけはゴメンです！」

「本当に頼もしい限りだよ。改めて最高のパートナーだねえ。

「それで二つ目」

「ドンと来いです」

まだ足元がふらつく雅也に今度は肩を貸すウエンデイ。

「ドンと来いて…頼もしいけど本当に変わったよね…」

「そこは気にしないでいいところなんですっ！それより二つ目は何ですかっ」

「やっぱキャラに合っていない自覚はあるんだね」

思わずニヤけてしまう雅也は、「ふう」と、ひと呼吸置い話し出す。

「二つ目は、また助けたいヤツが出てきやがったんだ。寂しそうで、孤独で、放っておけないんだ。そいつにお節介焼くのを手伝って欲しいんだ」

「？雅也さんのお節介は今に始まったことじゃありませんよ？昔っからそうです。今更我儘だなんて思いませんよ」

「お、おう。そうか…」

「でも後でシルヴィアさんには言つといた方がいいですよ？その人どうせ女の子ですよ。浮気だと勘違いされたら大変ですから…」

「何で女の子とバレて…てか浮気じゃないから！てかあいつとはまだそういう関係じゃ…」

そこまで言って試合中だったということに気づき我に帰る雅也。

突然叫び出したので、そこだけバツチリ観客にも聞こえていたようで会場が悪い意味でざわつき出した。

「ああそれはまた後であいつも含めて話そうくあwせdriftgy
ふじーp」

「動揺しすぎですよ雅也さん。落ち着いてください」

「うう…。最後の我儘、自分いいですか？」

いつも通り大袈裟に落ち込む仕草を見せ、ウエンディから離れ肩を借りずに立とうとする雅也。まだ意識が朦朧としているのか再び体

が傾く。ウエンディはそれを支えに行くが…

ダンっ、と倒れそうになるのを踏みとどまった雅也。

それと同時に

バチツ

静電気のような何かに弾かれてしまった。

(え…?)

一歩二歩後退りのように離れるウエンディ。

雅也の体からは静電気と表現するのは甘い、それはどんどん強まっ
ていき、

(雷—?)

「三つ目の我儘はこの試合、もう少し俺に無茶させてくれないかな?」

尽きたはずの星辰力が雷となって体から溢れていた

少しの沈黙——そして

「はあ…：今更止めても無駄だって分かりきってるじゃないですか」

その光景に驚きではない、沈黙を破ったのはそんな呆れた声だっ

た。

(フフツ… 我ながら身勝手なやつだねえ)

これ以上は何も言わなくてもいい

長年の付き合いだ

「やてきて…」

初めてこんなに心の底から気持ちを伝えた

後は示すだけだ——

「最終ラウンド、始めようか」

ウエンデイは雅也の隣に立ち、雅也は雷の星辰力を高める。

その視線の先には紗夜と綺凜が同じように並び立っている。これが互いに最後の攻防と理解しているのだろう、ありったけの星辰力が感じられる。

そして——

「天竜の——」
「雷竜の——」

『咆哮!!』

二竜のブレスを合図に最終幕は上がり――

暫くしてその激闘は、雅也達の勝利で閉じられた。

忍び寄る――

「お疲れさん、綾斗、ユリス」

「ああ、雅也達ももう大丈夫なのかい？」

「俺は試合の終盤には気が付いて見てたよ。しかし相変わらず底なしの星辰力だなあ」

既に準々決勝の四試合は終了し、いつもメンバーが綾斗達の控え室に集まっていた。

「それはお前達も同じだろう一色。あの場面で二人共新たな魔法を隠していたとはな」

「俺のは隠していた訳じゃないけど、ウエンデイのは俺もビックリしてるよ」

「私は攻撃魔法の星辰力配分が苦手で、雅也さんに止められていたのですが、あの瞬間は勝手に体が動いてて…」

「まああれが無かったら完全に負けてたねえ」

ケタケタと笑いだす雅也にウエンデイは頬を膨らませて抗議する。内心では振り返っただけで冷や汗をかくような場面だったのだが。

「…だがやはり雷の魔法、なぜあの場面まで隠していた？」

紗夜が少し悔しそうに疑問を投げる。

「ああ、それは皆が言うように別に隠していた訳じゃないよ？昔は普通に使えてた。ある時に使えなくなっただけ、ウエンデイのお陰で使い方を思い出したという感じなのかなあ」

「で、でも使い方を思い出してもあの時の一色先輩からは星辰力を感じませんでした。それもどういう事だったのか気になります」

と今度は綺凜から質問される。それにも雅也は答えるが…

「それは俺の星辰力が

各魔法によって別々にあるんだ」

ウエンデイと雅也以外は一瞬、頭に？が浮かんだ表情をした。

「あ、ああ。言葉足らずだったね。俺の使う魔法は主に、氷の造形魔法、炎の滅竜魔法、雷の滅竜魔法、それ以外の魔法の四つに分けられるんだ。そしてそれぞれ一人分ずつ星辰力があるんだ」

「つまり一色の星辰力は単純に人の四倍あるということか？」

「そ、流石ユリスは理解が早いねえ。戦闘用では主に氷、炎、雷。でも雷の滅竜魔法は、炎と氷の星辰力が切れてから使えるようになったんだ。だからあの試合で、二人は『星辰力満タンの一人分の相手が追加で現れた』て感じだったんだねえ」

綺凜と紗夜は雅也程ではなかったがボロボロだった。その場面で新たにもう一人分、更にはウエンデイの戦闘参加により厳しい戦いを強いられたのだ。

「炎と氷で単純に二人分の星辰力、だから序盤は綺凜ちゃんと紗夜の二人の相手が出来てたんだね」

「ええ、そして実に見応えのある試合でしたね」

感心したような綾斗の言葉に続いて控え室にはクローディアが入ってきた。何やらいつになく機嫌がいいといった感じだ。

「綾斗とユリス、刀藤さんと沙々宮さん、そして一色君とウエンデイさん、星導館学園の生徒がここまで活躍したのは実に素晴らしいです」

「クローディアもご機嫌だねえ。なんだか控え室なのに賑やかになつてきちやつたねえ」

「そういえばお前達、誰かフローラを見なかったか？」

賑やかな中、あの特徴的なメイド姿の子がいないことに気付く一同。

「迷子かな？それなら探しに行こうか」

綾斗がそう提案し控え室を出ようとしたその時、ユリスの携帯端末に着信が入った。

「音声通信だと…？」

雅也もその通話に耳を傾ける。

(何か嫌な予感がする… 準決勝前だし、何もなければいいけど)

だがその予感は的中する事になる。最悪の形で――

「フローラが、誘拐されただと…」

最強の――

《鳳凰星武祭》準決勝第一試合

会場の熱が雅也達の控え室まで届いてきている。あれだけの激闘を繰り広げた二人の相手は、アルルカントのアルデイ・リムシイペアだ。

「綺凜ちゃんと沙々宮先輩は大丈夫ですかね？」

「何かあっても二人なら大丈夫、とは言えないかなあ。敵が敵だし、試合以上に何が起こるか分からないかなあ」

雅也とウエンデイも試合ということで綺凜と紗夜を見送って控え室に来ていた。

「直接的ではなく間接的に… 証拠が残りにくい手段で邪魔をしてるのはさすが《悪辣の王》だよ」

「フローラちゃんを誘拐して、天霧先輩の《黒炉の魔剣》の使用を禁止」ということは天霧先輩が優勝されると不都合があるという事ですね」「綾斗の願いは確かお姉さんの搜索だったね。でもなんでデイルクがそれを妨害するんだろうねえ」

雅也は空間ウィンドウを操作し、とあるページを開く。そこにはレヴォルフの生徒の情報や表向きには公表できない情報が並べられていた。

以前、デイルクと接触した際に情報交換用に連絡先を受け取っていた雅也は、そこから逆に潜り込み様々な情報を得ていた。

しかしそこに今回の誘拐の件は無く、デイルクも慎重に扱っており秘匿性の高い事件なのだろうという事を確認していた。

「ダメだア、それに関する情報が全く無いね。せめて現場に行ければいいんだけど」

「それはユリス先輩達も同じですよ。それに私達は生徒会長から情報を探す役割を頼まれたんですから現場には行けませんよ」

二人を見送った後、クロードディアから雅也の携帯端末に『再開発工リア付近の情報収集』のメッセージが届いていた。捜索に行くメンバーと情報を集めるメンバーに分けて効率よく探す作戦だ。

「…試合が早く終わればもっと集められる…か」

「でも相手はあのアルルカントの二人です。あの障壁は私の付加をかけた雅也さんでも攻略できるかどうか…」

「そうだねえ。普通にやれば大苦戦するだろうねえ」

「普通にやれば… ってまさか何か秘策があるんですか!？」

「ああ。昔、教えて貰った物なんだけどね——」

『さあさあお待ちせいたしました！鳳凰星武祭準決勝第一試合は星導館学園の一色雅也・ウエンデイ・マーベルペア対アルルカントのアルデイ・リムシィペアです！』

『ここまで圧倒的な差を見せつけて勝ち上がってきたアルルカントのペアと準々決勝で死闘を繰り広げたペアの戦い。これも目が離せないですね』

『一色選手達は果たして、あの絶対障壁を破れるのでしょうか!?そこが見所の一つとなりそうですね!さあいよいよ試合開始です!』

「《鳳凰星武祭》準決勝第一試合、試合開始！」

試合開始の宣言がされたが、アルデイとリムシイは動く気配を見せない。

「随分と余裕だね、アルデイにリムシイ」

「我輩は既に貴君の魔法や星辰力のデータをマスターにより研究されている。その結果から貴君の星辰力では我輩の障壁を破る確率はゼロに等しい。故に今回も一分間の猶予を与えよう」

「そりやまたえらい自信だねえ。」

まあ一分あれば準備は整うけどね」

ボソツと意味深な事を呟く雅也は、目を瞑り星辰力を高め始める。更にはウエンデイが付加魔法をかける。

それを見たリムシイはアルデイに注意を促す。

「気を付けなさい。何かあると見た方がいいです」

「むう、だがデータでは彼の星辰力の量は凄まじいが魔法の威力は我々の相手ではないのだぞ」

「彼は何かを隠している。今までの試合もそうでした。如何なる事が起きても対処できるようにしておきなさい」

アルデイは仁王立ちながらもその警告通りにいつでも対応可能な準備を整える。

しかし雅也は星辰力を高め続け、動く気配を見せない。

『何でしようか、両者睨み合いのような状態が続いてますね？試合開始から既に三十秒が経過していますが…』

この動かない試合に観客も次第に痺れを切らし始め、ヤジやブーイングが飛び出す。

それでも尚、雅也は星辰力を高める。

(うーん、周りが煩くなってきたなあ… そろそろ準備完了だし静かにしてくれないかなあ)

準決勝第一試合前

控え室にて――

「教えて貰った魔法？それがあの二人を、いや二体に対しての策なんですか？」

「まあウエンデイの言う通りまともに押し当てたら勝てないねえ。でもその魔法はちよいと範囲がデカすぎてね。普通に使用すれば試合会場一帯吹き飛ばす規模なんだよねえ」

「ええ!?そんな魔法使えたんですか!?というかか一带を吹き飛ばすつて…」

とんでもない事をいつも通りいう雅也にウエンデイは驚きと呆れで反応する。確かにそんな魔法ならば二体には有効かもしれないが、会場を壊すような魔法はまず使えないだろう。

「そこで、だよ。恐らく奴らは一分間の猶予を与えるだろう。そこで俺はその魔法の範囲の調整をしたいんだ」

「調整、ですか。ということとは会場内サイズに小さくするのですか？」
「威力はそのままに、範囲は小さく。それをするには結構時間と集中
力があるからねえ。今まで使えなかったけどこの試合なら、ね」

『残り十五秒！一色選手は何を考えているのか!?!』

実況の煽りが会場をヒートアップさせる。

そしてウエンディは雅也に声をかけた。

「雅也さん、そろそろですよ」

「…うん。OKだよ」

目を開いた雅也がアルデイとリムシイを見てニヤリと笑う。

「待たせたねえお二人さん。決着、付けようじゃないか」

「ふむ。何やら星辰力を高めていたようだが、貴君の魔法では我々を
倒すことはできんぞ」

「そりゃあ俺も分かってるさ。だから俺のとおっておきを二人に受けて
もらう。それが防がれたら俺らの負けだよ」

「なるほど。一発勝負という訳だな。実に面白いではないか！受けて
立とう！」

「このポンコツはまた勝手に…」

リムシイは呆れながらもそれを承諾したのだろう。戦闘の構えを
とった。

よし、乗ってきた…

あの二体を倒すには綾斗のような絶対的な何かが必要だろう。ただ俺の普段使っている魔法にはそんな絶対的なものは無い。

だから少し卑怯かもしれないけど、この条件に乗ると踏み、有利なこの状況で倒す！

あの二人が教えてくれた魔法なら…

俺の最強だったあの二人の魔法なら――

「七つの星に裁かれよ！」

会場に黒雲がかかり始める。観客も何が起きるのか、不安と期待でザワつきだす。同時に雅也の星辰力が一気に上昇する。

力を貸してくれ…

コウ――チヒロ――

「《七星剣》!!」

黒雲から七つのレーザーがアルデイとリムシイに降り注ぎ、展開していた障壁は紙切れのように貫通し二体に直撃する。

まるで隕石のような破壊力で降り注いだ魔法は、二体を次第に壊していく。

そして――

「エルネスタ・キューネ、カミラ・パレート、意識消失」

「試合終了！勝者、一色雅也&ウエンディ・マーベル！」

勝者を告げるコールが宣言され、会場は喝采の嵐に包まれた。

その中心には、魔法によって壊れたステージの地面と、右腕を天へ突き上げている雅也とウエンディが立っていた。

話をしよう

『… 私が言いたいこと、分かる？』

「スミマセン…」

『君は昔からそうだったよね？男の子ってどうしてこうなんだらう…』

「うぐう…」

雅也は今、お説教を受けていた。

栗色の髪の正直地味な印象なその子は、怒りをなんとか抑えようとしているのが画面越しからでも伝わってくる。それに全く反論出来ない雅也はただただ縮こまった様子でいた。

現在は《鳳凰星武祭》準決勝第二試合の最中であり、多数展開された空間ウインドウの一つもその様子を映している。

だがそんな事はお構い無しに画面の向こうの女の子、《戦律の魔女》こと、シルヴィア・リユーネハイムはお説教を続ける。

そもそも何故画面越しにお説教される事になったのか…

それは僅か数分前に遡る――

「よっし、準決勝突破！」

そう言つて控え室に急ぎ足で戻った雅也。決勝進出した割には少物足りない反応だが今は仕方が無いのかもしれない。

試合終了後、インタビュアーなどをウエンデイに任せすぐに控え室へと戻った雅也はウインドウを多数展開し、表示された映像を同時に確認する。そこには恐らくフロアが攫われたであろう再開エリア

の映像が映っている。

「情報は幾ら探しても見つからなかった。最終手段ではあるけど目で探すしか…」

レヴォルフの情報を盗み見てもこの件に関する事は見つからなかった。実際に再開発エリアへ行けば隅々まで搜索できるのだが、万が一怪しまれた場合はフローラの身が危ないのでそれは避けたい。かと言って無い情報を探すのは論外だ。

「でも映像で探せる範囲には限界があるし…クソツ！あの時俺がへまして《孤毒の魔女》にバレてなけりゃ…」

あの日、雅也が油断し彼女に見つかったが為、再開発エリアから撤収せざるを得なかったが、まさかここに来て致命的な傷になるとは思っていなかった。

「畜生…グダグダ考えるな！今は目を使え！何か、何か…」

その時、雅也の目に止まったのは見覚えのある人だった。

恐らく雅也かウエンディでなければ目に止めもしなかったであろうその人はこの状況を打破できる唯一の可能性に思えた。

雅也は携帯端末を取り出しある所へとコールした。

数回コールした後にはウィンドウが開きその人物の映像が映し出される。

『雅也、君？どうしたのいきなり？』

「本当にいきなりで悪いんだけど、頼みたいことがあるんだ。受けてくれるか？シルヴィア——」

それから雅也はシルヴィアに誘拐の件を話し、シルヴィアも快く捜索の協力を受けてくれた。彼女の力であれば居場所を特定できるのではという雅也の考えが功を奏し、居場所を特定できた。

後はこれを紗夜やクローディアに連絡すれば事件は解決へと向

かってくれるだろう。

「ふうく、一安心一安心」

と、なるハズだった。

『ところで雅也君？今度は私から聞いて欲しいことがあるんだけど』
「んく？何かね何かね」

決勝進出を決め、この事件も解決に向かっている。

ああ万事解決――

『私がこの前言ったこと、覚えてるよね？』

「…ん？」

『準々決勝試合前、無茶しないでって言ったよね』

「…あー、いやでもあれは」

『雅也君』

「ハイッ」

思わず声が裏返ってしまった…

いつも画面の向こうで歌っている彼女からは想像のつかない声が雅也を呼んでいる。

明らかにマズイ。怒ってる。これはあ、ヤバい。

『少し、お話ししようか？』

決勝戦開始

『一色、今回の件は本当に感謝する』

画面越しにユリスが頭を下げる。彼女が頭を下げるなど滅多にないだろうということ、雅也は少し驚いてしまう。

《鳳凰星武祭》決勝戦が始まる十数分前。選手控え室で雅也とウエンデイは綾斗、ユリスからの電話に出ていた。

「頭を上げなよユリス。友達が困ってんだから、力になれるなら手伝って当然だよ」

『友達か、そうだな。一色、少し見直したぞ』

と、少し照れるように呟くユリス。

「フッフッフ、もつと見直してくれたまえよ?」

『ちやらんぽらんから顔見知り程度にはな』

「聞きたくなかったその事実!」

いつも通りのやり取りに安心する一同。

フローラの誘拐事件は雅也の情報により速やかに解決され、予想通り黒幕はディルクとの事だった。

(まあ場所を特定したのは俺じゃないんだけどねえ…)

ふと、先日の事を思い出す。

シルヴィアがフローラの居場所を特定し、雅也がそれを皆に伝える。後に雅也は説教を受けるのだが――

(じゃあ鳳凰星武祭が終わった後の学園祭、私とデートしてくれたら許してあげる!)

という条件を提示され、説教に疲れていた雅也は二つ返事でそれを承諾してしまった。

「う、今から緊張してくるなあ…」

『雅也、大丈夫？なんか顔色が少し悪いような』

『武者震いだよ、心配しないでくれえ…』

「なんだか雅也さんのが私にも移ったかもしれない… うう」

先日の約束を思い出して頭を抱える雅也。それを心配する綾斗に、試合前で極度の緊張をしているウエンディ。

だが、武者震いというのもあながち間違いではない。遂に決勝が数分後に控えている四人がこうして会話をしている。

緊張感はまるで無いのだが。

『雅也がフローラちゃんの居場所をしてくれなかったら、今頃俺は棄権してたんだろうね』

『一色にとつて今回の件、手伝わない方が試合が有利になったのではないか？』

確かに客観的に見れば対戦相手が窮地に立たされている所に手を伸ばすのは、このアスタリスクにおいて不利益でしかない。

だが――

「クロードディアに言われたからつてのもあるけど、やっぱり全力の二人と戦いたかったのがあったからね。それに――」

「友達ってそういうものだからねえ」

『…何か昔の一色とはかなり違うな』

「大会通して色々知ったからねえ。自分の未熟さとか」

そう言つてウエンディへ視線を移すと、ニコリと微笑み返してくれた。

彼女が居なければここまで来れなかったのは明らか。そんな彼女の為にも負けられない。

「綾斗、ユリス。全力でぶつからせてもらおうよ？」

『なら俺達も全力で、だね、ユリス？』

『フツ、無論だ』

「ま、負けません！」

『さあやって参りました！両ペアがゲートから入場してきましたア！』

《鳳凰星武祭》決勝戦。 実況も観客もかなり熱が入っている。

当初は歓声や雰囲気慣れなかった雅也とウエンデイではあるが、ここまでの死闘をくぐり抜けたこともあり今では、この雰囲気心地よい物になりつつあった。

『星導館同士の両ペア。どちらが優勝しても星導館の優勝ではありませんが、目が離せない戦いになることは必死！』

『予想では天霧選手ユリス選手ペアが有利という見方がありますが、ここまでの試合、一色選手の星辰力の量も尋常ではない様ですし、ウエンデイ選手の戦闘能力も大会開始時のそれとは見違えるほどです。本当に楽しみですね』

『さて、そろそろ準備が整ったようです！どちらが勝つのか!？』

「《鳳凰星武祭》決勝戦、試合開始！」

「じゃあ今回も頼んだよ、ウエンデイ」

ポンとウエンデイの肩に手を乗せる。

「はい！《神の王冠》《神の騎士》！」

決勝戦ということに惜しみなく付加をかけるウエンデイ。

「更に《攻撃力、防御力、速度倍化》！」

これでようやく戦闘準備完了だ。綾斗相手だと並の星辰力では一

瞬でやられてしまう。

それと同時に雅也が勢いよく飛び出す。

「火竜の鉄拳！」

「ふっ！」

付加により普段の数倍以上の星辰力を纏った攻撃を、綾斗は《黒炉の魔剣》で正面から迎え撃った。

互いの炎がぶつかり合い周囲の温度が急上昇する。普通は《黒炉の魔剣》とただの拳をぶつけるなど危険極まりないのだが、付加魔法によりそれを可能とされていた。

だが、

「はあああああー！」

「くっ!?!」

星辰力を強め、雅也の拳を綾斗が一気に弾き返す。

ウエンデイの付加魔法をもつてしても綾斗の星辰力を上回る事が出来る事が出来なかった。

更にそこへ、

「咲き誇れ——呑竜の咬焰花！」

ユリスの炎の竜が弾き返された反動でバランスを崩した雅也にピンポイントで襲いかかる。だがそれも——

「天竜の咆哮！」

ウエンデイのブレスで炎の竜を消し去ってしまう。

両ペア完璧言っているいい連携に互いに感心してしまう。だが相手を褒めている余裕は四人全員には無い。少しでも油断すればたちまち崩れてしまうだろう。

「助かったよウエンデイ」

「いえ、あれくらい何とも無いですよ。それより雅也さん……」

「ん？」

一旦体制を立て直す為に綾斗達から距離を置く。そしてウエンデイは何か一言二言耳打ちをし、

「……了解だよ」

雅也の承諾と共にウエンデイが綾斗、雅也がユリスの前に出てくると、ウエンデイが衝撃の決断を宣言した。

「ユリス先輩は雅也さんが。そして天霧先輩は——私がお相手します！」

信じているから

「ユリス先輩は雅也さんが。そして天霧先輩は——私がお相手します！」

そうやって構えを取るウエンデイの少し斜め後ろに雅也が立つ。どうやら本当にウエンデイが前衛を務めるようだ。

これには綾斗とユリス、観客、実況もざわついてた。

『こ、これはどういう事でしょうか？？ウエンデイ選手はまだ何か隠しているのでしょうか？』

『そう考えるのが妥当ですが、一色選手が前衛でも充分押せると思えますし…ウエンデイ選手が天霧選手の相手をするのは少々荷が重いかと…』

「まったく…つくづく底が見えないペアだ」

「何の意図があるのか。しっかり見極めないとね」

「そうだな。しかし相手の策をただ見て待つてやるほど甘くはない。行くぞ、綾斗！」

ユリスの気合の入った掛け声とともに綾斗がウエンデイに仕掛ける。

だがウエンデイは綾斗の動きなど全く気にすることなく、目を閉じすうっと大きく深呼吸を始めた。

（なんだ？星辰力が少し高まっているような…）

それを見てウエンデイの行動に注意を払うが——

「集中力が足りてないぞ、綾斗！アイスメイク《氷欠泉》！」

綾斗の足元から、氷でできた間欠泉が無数に噴き出てくる。それをジャンプで躲すが更に雅也は、

「《大槌兵》！」

今度は空中にいる綾斗目掛けて上から氷のハンマーが降り注ぐ。

「——フッ！」

綾斗は空中で体を捻り《黒炉の魔剣》でそれを切り裂き、砕けた氷

と共に着地地点にいるウエンデイ目掛け急降下する。

だがそれを狙っていたかのようにウエンデイは目を開き急速に星辰力を高め足に集中させ――

「天霧辰明流――腑牙軀!」

「天竜の――鉤爪!」

急降下の勢いを乗せた《黒炉の魔剣》とウエンデイの蹴りがぶつかる。しかし、ウエンデイの足元がその重さに耐えきれずにヒビを入れ始めた。更にそこへ横に回っていたユリスの魔法が放たれる。

「咲き誇れ――赤円の灼斬花!」

「させないよ!雷竜の――咆哮!」

すかさずそれを雅也がブレスで無理矢理消しカバーする。それを確認したウエンデイが今度は手に星辰力を集中させる。

「天竜の――碎牙!」

「――ぐっ!?!」

剣で押し切ろうとしていた綾斗へ攻撃が入る。星辰力を防御に回し何とか綾斗は耐えるが大きく後ろへ吹っ飛ばされた。体制を空中で立て直し着地をする綾斗を、

「火竜の咆哮!」

「――フツ!」

今度は炎のブレスで雅也が着地の瞬間を狙うが、それも綾斗が《黒炉の魔剣》で薙ぎ払う。そしてそのまま雅也へと突っ走り出す。

「雅也さん!」

ウエンデイがフォローへ向かおうとするが――

「行かせんぞ!咲き誇れ――栄裂の炎爪華!」

ウエンデイの向かう地点を予測しユリスの技が炸裂する。

だが走るスピードを落とし、止まったかと思うとウエンデイは思いもよらぬ行動を取った。

「!?!何を――」

ユリスの炎が数メートル先で噴き上がる前でブレスを放つ準備を始めたのだ。

(見切られたか…いや、だがあの向きでその星辰力のブレスを撃てば一色もタダでは済まんぞ!?)

そのユリスの視線の先で既に、雅也の目の前に綾斗が迫ってきている。このまま咆哮を撃てば雅也諸共攻撃することになるだろう。

それでも尚、ウエンデイは星辰力を練り雅也は綾斗を迎え撃つ構えを取る。

そして――

「天霧辰明流――」

(――ドンピシャッ!)

ニヤリと笑う雅也の足元に一瞬、魔法陣が現れたと思つた瞬間――

綾斗の目の前にブレスを放つ直前のウエンデイが突如現れた。

「天竜の――咆哮!」

「ッ――!?!ぐああああ!」

既に構えていたウエンデイが一瞬早くブレスを繰り出す。

《黒炉の魔剣》に星辰力を集中させていた綾斗は竜巻のようなブレス攻撃をまともに喰らってしまい、先ほどのような受け身も取れず吹き飛ばされ、そのまま土埃を上げ壁に激突する。

「綾斗!」

吹き飛ばされる綾斗を目の当たりにし、ユリスはこの一瞬で何が起きたのか理解が追いついていなかった。

(ウエンデイが何故急にあの場所に!いや、それなら一色は一体何処

へ――)

「こつちもいくよユリス!」

「!?!」

ユリスが必死に思考を巡らせる横から雅也の声が聞こえた。そこはウエンデイが数秒前まで星辰力を練っていた場所。

「——まさか…： 場所を入れ替えて?!」

それに気付いたユリスはようやく状況を理解するが…

「火竜の煌炎!」

「っ、ぬああ!」

巨大な炎がユリスを焼き尽くさんと叩きつけられた。

ユリスは技が直撃する直前、何とか自身の周りに炎の壁を展開するが即席の壁ではやはり簡単に押し切られてしまった。

もはや雅也達の得意技である不意をつく作戦。この決勝戦でもその真価を発揮し、この試合を見ている全ての人間に『互角かそれ以上』の印象を与えていた。

『何が起きたのでしようかあ! 一色選手とウエンデイ選手の位置が一瞬にして入れ替わったあ!』

『魔法陣が一瞬見えたように思いましたが…：二人が入れ替える魔法の星辰力を練る様子は全く無かったですか…?』

実況すらもこの一方的な展開に追いつけていない。確かに雅也は迎え撃つ構えを取っただけで、星辰力を練ったのは入れ替わった直後だ。ウエンデイからもそのような星辰力を感じ取れなかった。

「くッ——」

ブレスが直撃しまだ意識がハッキリしていない綾斗は、何とか起き上がると、必死に頭を働かせ、ある一つの考えに辿り着く。

(二人からは確かにそんな気配は感じなかった…：なら自動的に入れ替わり魔法が発動した…：?でもあの局面でそんな都合のいい話が——)

あるはずがない、普通はそうだ。

だが完璧に不意をつくあの瞬間を、雅也はこの一撃を狙っていた?

この時を——
最初から——？

綾斗の記憶がこの答えを見つかるべくフル回転する——

『じゃあ今回も頼んだよ、ウエンデイ』

「まさか、あの時既に!?!」

試合開始直後、雅也がウエンデイの肩にポンと乗せた。その時既に雅也はウエンデイに魔法を仕込んでいたのだ。ウエンデイを自身の場所と入れ替える魔法を、しかも時限式——

だから発動した時、綾斗ですら気付けなかった。

綾斗がぼやけたピントをその少年に合わせる。その少年は振り返り「その通り」と笑みを浮かべた。

「俺が誘導したんだよ、戦局を。あの瞬間、あのタイミングで魔法を発動させ不意をつく。一秒もズレる事なく。最初から……ね。わざと攻撃を外したり、タイミングの調整するの大変だったよお。でもあくまでこれは次の舞台の準備でしかないのさー!」

攻撃を何とか凌いだユリスは荒い呼吸をし、膝について何とか立ち上がった。視線の先では高らかに第二ラウンドを宣言した雅也がとてつもない量の星辰力を高め——

「アイスメイク 《城壁》!」

みるみると地面から造られた氷の壁はあつという間にドームの天井へ到達した。簡単には破れない厚さ。近くで見えるものを圧倒する氷壁がステージを分断してしまった。

壁の手前には雅也が、壁の向こう側にはウエンデイと綾斗。

これで、ユリスと綾斗が引き剥がされた形になった。これこそが雅也の狙っていた場面ということなのだろう。

(やられた……元から一対一に持ち込む作戦だったというわけか。完璧に誘導された……あの転移魔法による奇襲も確実に私と綾斗を分断する為の……だが……)

「解せないのは、何故お前が綾斗の相手ではないのか、だ。お前のパートナーには悪いが、ウエンディでは実力、経験が足りないのではないか？」

所々、先程の攻撃で焼けてはいるもののまだ戦える。ユリスは立ち上がり真つ直ぐに雅也と相対する。

「それはウエンディは綾斗に勝てない、と言いたいのかなあ？」

「いや、今更お前達の実力を見誤るわけにはいかないのでな。だがそう考えるのが自然だったのではな」

「そうだねえ…。俺もユリスの立場ならその考え方はごく自然に出てきたさ。まあこれが――」

俺が考えた作戦だったら、の話だけどね」

(この作戦を考えたのは一色ではないと言うのか!?)

思わず声に出しそうになるのをユリスは何とか心に留める。これ以上表に出そうものなら自分達は一色ペアに読み勝てない。それを認めてしまうからだ。それを知ってか知らずか雅也は続ける。

「ウエンディからこの作戦を聞いた時は驚いたよお。自分が綾斗の相手をするって言い出してねえ。でも俺は驚き以上に嬉しかった。

だってこの作戦はウエンディが勝てるって俺が信じなきやいけない。そして俺が信じて任せてくれるってウエンディも信じてたからさあ」

まるで思い出話をするように嬉しそうに話す雅也。

「だから信じた。仮に俺がこの作戦を考えたなら躊躇ってたかもしれない。でも俺を信じて作戦を話してくれたウエンディを、俺は何よりも信じるよ」

恐らくこんな真つ直ぐな表情の雅也は、壁の向こうのウエンディですら見たことがないだろう。その表情を見たユリスは確信する。

「…やはり変わったようだな。一色」

「おかげさまでね」

フフツ、と二人は笑う。

「さて、他に聞きたいことは無いかなあ？」

「いや、充分だ。お前がどれだけパートナーを信じているかよく分かったさ。だが私も綾斗を信じている。向こうの二人も同じく我々の事を。ならば互いの期待に答えるでしょう」

空気が変わる

覚悟を決めた者同士、一切手は抜かない

壁の向こうのパートナーの為に

絶対負けられない

「いくぞ、一色——」

ユリスが星辰力を解放させようとしたその時だった。

ドゴオン!!

と壁の反対側で爆音が轟いた。

そしてユリスは雅也のあっけらかんとした声と共に、信じられない光景を目にする。

「ああ、でもユリス。」

これは『綾斗が勝てない』ように出来てるから」

爆音の中心には先程とは『桁違い』の星辰力のウエンデイが

そして、抉れた地面の先には綾斗が倒れ込んでいた――

熱戦

「綾斗！」

氷壁の向こう側で、パートナーの身に想定外の事態が起きていた。ユリスは氷壁へ近づくが、その道を阻むように雅也の雷球が数弾飛来する。

「この壁より先に行きたければ、俺を倒してから行けってヤツだねえ」
「…さっきの『綾斗が勝てないよう』に出来ている」というのはどういう事だ」

雷球を身軽に躲したユリスは、瞬時に冷静さを取り戻し雅也へ問う。

「この氷壁には二つの意味があつてねえ。一つ目はさっき言った通り、俺たちを分断する為さ。そして二つ目は…ウエンディ、あの子に秘密がある」

「ウエンディと氷壁…」

自身に問いかけるように呟くユリスは、視線を雅也の更に先、壁の向こう側の戦況を観察する。

この作戦は雅也ではなくウエンディが中心の作戦

彼女が突然パワーアップしたのは何故

綾斗があそこまで苦しそうにしているのは――

ふと、ユリスは小さな異変を感じる。

星辰量の上がったというだけの相手と戦うだけで、果たして綾斗の息があそこまで上がるだろうか？あれは――

「綾斗、呼吸が…乱れているっ！」

「いいとこに目を付けたね。流石ユリス」

まだ答えには辿り着いていないユリスの思考を遮るように雅也が

感嘆の声を上げる。

「呼吸、そう呼吸だ。確かにそれが俺たちの作戦の重要なポイントだねえ。でも、そのに至るまで出してこそ百点の答えさ」

そう言うも雅也は片手を挙げ、頭上に三つの特大雷球を作り出す。

「まず一つ目。俺たち滅竜魔導師はある特定のものを食べることによ
り、パワーアップが出来る。ウエンデイの場合は天空の滅竜魔導師、
空気を喰らうことによつてパワーアップ出来るんだあ、よッ！」

答え合わせと言わんばかりに雅也は頭上の一つ目の雷球を振りか
ざした手に合わせ発射する。

それに対抗し、ユリスも炎の花を三つ展開し、一つを雷球へとぶつ
け相殺した。

「次に二つ目。この氷壁で隔たれた空間で、あれだけ空気を吸収すれ
ばいずれは『酸素』は無くなるだろ？」

その問いかけと共に、二つ目の雷球は槍の如く鋭いフォルムに変化
しユリスへ放たれ、

それを同じく形状を変え、ユリスは迎え撃つ。

「いくら星脈世代とはいえ酸素の無い空間での戦いなど、持って五
分…か。だがそれはお前のパートナーも同じ事だ。まさか相打ち
狙いの作戦ではあるまいな」

「勿論さ。滅竜魔導師の肺はちよつと特殊でねえ。普通の星脈世代よ
りも長時間呼吸をしなくてもいいみたいなんだよ」

「酸素が無くなってからは、最低限の力で綾斗を凌げば…成程、確か
にそれでは分が悪い。つまり…」

少しユリスの口元が緩んだかと思うと、星辰力のギアを一つ上げ、

残っていた炎の花をあつという間に数倍もの大きさへと変化させた。

「私が一色を退け氷壁を壊し、酸素を流し込む。一色、お前はそれを阻止する、という凶だな」

「そ、そうだけどまだ三つ目が…」

話の途中に攻撃用意をされ驚いている雅也。それをお構い無しにユリスの炎の花は、熱とその大きさをより強大にし——
「フッ！」

雅也目掛け炎の大輪が放たれ爆発音を上げながら着弾した。

今日一の、渾身の一撃だった。

だが——

「まだ話の途中なのに… まあ俺の長話は今に始まったことじゃないけどもさあ」

「!？」

着弾点は熱気と煙で揺らぎ霞んでいるが、確かに雅也の声がしている。

——ユリスはその中に、周りの「炎を食べる」雅也姿を見た。

「炎を… 喰らっているだ?!？」

雅也が辺りの空気を吸い込むと、炎がみるみる雅也へ吸収される。ユリスは目の前の肉食獣の捕食シーンと錯覚するような豪快さを啞然と眺めていた。

それと同時にユリスは雅也の言いかけた「三つ目」の言葉を理解した。

(ウエンデイが天空の滅竜魔導士、空気を喰らうなら、一色は火の滅竜

魔導士、炎を喰らうもの……か)

ならば綾斗とウエンディよりも、こちらの戦況の方が分が悪いなんてものではない。

ユリスの炎を操る攻撃は雅也に対して効かないという事になる。

「つぷはー……ちそうさまあ。ユリスの炎は上質だねえ」

と、呑気なトーンな雅也。

その星辰量は綾斗に匹敵するものに膨れ上がっていた。

「さてさて……さすがに分かったと思うけど、ユリス。君では俺に勝てないよ」

一変、冷たく突き刺さるような雅也の一言。

事実、ユリスの攻撃は雅也には通用しない。

圧倒的な星辰量を前に、観客含め、その場の全員が雅也の勝ちだと悟っていた。

しかし、ユリスの目はまだ諦めていなかった。

「生憎、まだ負けていないならば……私は諦めることは決して出来ないー！」

数十の戦輪が現れ、雅也の後ろ——ステージを分断している氷壁へ攻撃を仕掛ける。

(一色を倒せずとも氷壁に穴さえ開けば、少しでも可能性があるならば——)

まだ負けていない

綾斗が戦っている

あの状況で諦めずに抗っている
ならば自分が、パートナーが諦めていいはずがない！

「咲き誇れ——赤円の灼斬花！」

祈るような思いの戦輪は、雅也を躲し氷壁目掛けて飛び交う。

その目を、諦めない闘志を感じ取った雅也も、雷球を展開し自身に
炎を纏わせる。

「それでこそ、だねえ。君の覚悟に応えようユリス！」

そして氷壁の片側の『熱戦』は、最終局面へと向かう——